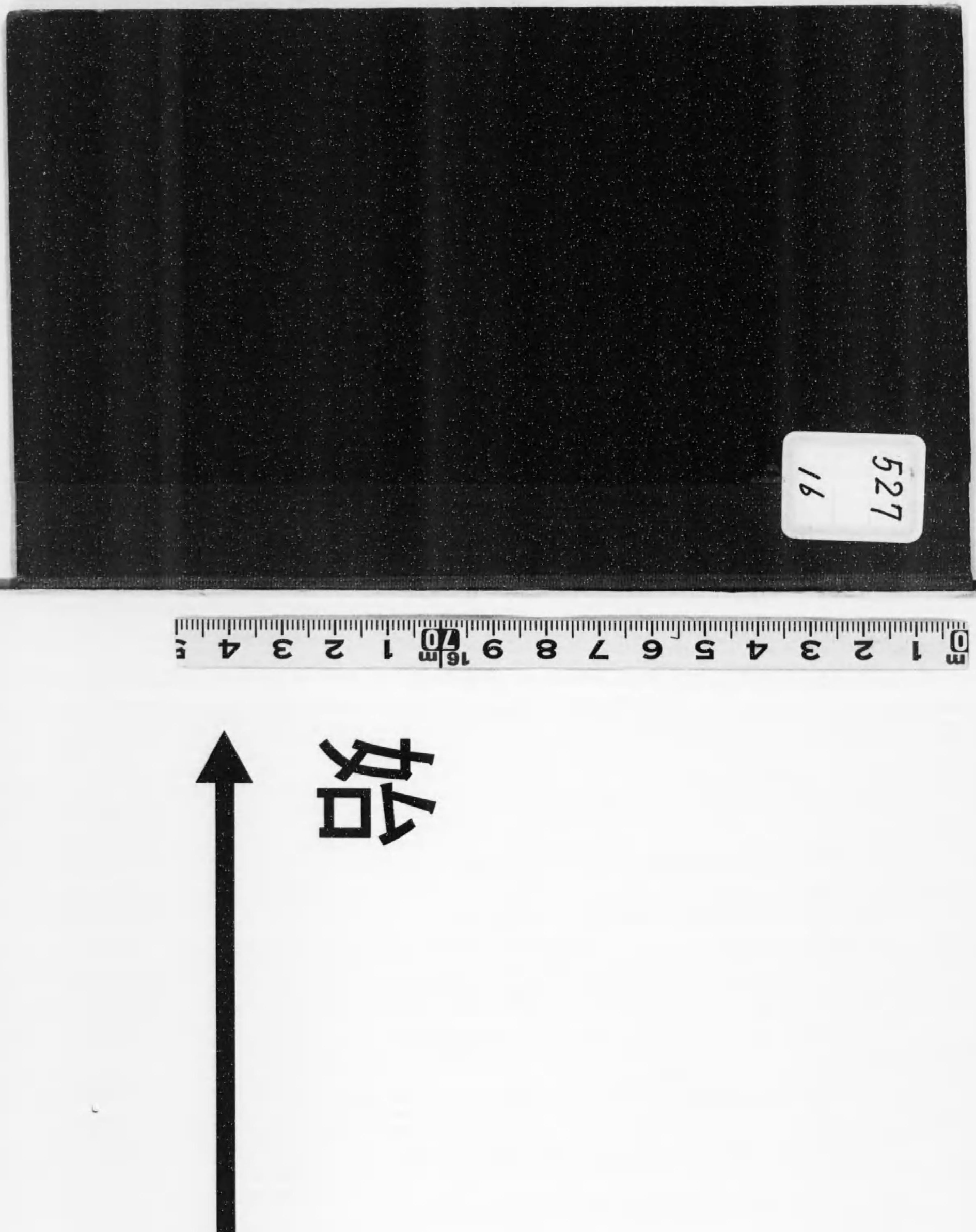
527
16
40

25. 2. 27

56

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第四卷

東京 春陽堂版

大正
14 2 2
内交

527—16

第四卷 目次

品川の臺場……一
浅茅が宿……一〇五
眞田三代記……一四九
浪華の春雨……一九三
なこその關……二一九
平家蟹……二〇七
新朝顔日記……二三九
近松門左衛門……二七五
自來也……二九一

品川の臺場

明治四十四年十一月作。
明治四十五年（大正元年）一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割――安藤織部正、金杉の清吉（市川小團次）むき身寶七之助（市川壽美藏）佐藤半左衛門、青木頼母（澤村源之助）番頭傳藏（市川市十郎）横井源五郎（市川荒次郎）德の市（市川左升）角の市（澤村源十郎）お照（市川松蔦）お雪（坂東秀調）大橋檢校、阿部伊勢守（市川左團次）など。

第一幕

（一）

登場人物――阿部伊勢守。安藤織部正。青木頼母。横井源五郎。大橋檢校。その娘お照。剝身寶七之助。その姉お雪。座頭德の市、角の市。人入れ金杉の清吉。その小頭芝井町の源藏。露月町の藤次。子分勘太、長八。梅本の女房おたき。佐藤半左衛門。その妻お豐。その番頭傳藏。ほかに武士。浪士。矢場女。女房。小兒。召仕。人足など。

江戸時代、安政元年正月廿五日の午後。

芝神明前。上のかたに大華表ありて、うしろには神明宮の社殿及び境内をみる。下のかたは梅本といふ矢場にて、二重屋體の店。店さきには長火鉢を置き、かたへには楊弓と矢桶あり。なかば開き

品川の遊場

たる正面の障子より射場および的など見ゆ。

（人入れの小頭芝井町の源藏、露月町の藤次は店に腰をかけ、おなじく子分勘太、長八の二人は表へ床几を持ち出して腰をかけ、畑草をのみゐる。矢場の女房おたきは長火鉢のまへに坐り、矢取女お兼は弓の弦を張つてゐる。）

勘太。　どうだい、けふは忌に寒いぢやあねえか。

長八。　ほんたうに今日のやうな日は、休みで助かると云ふもんだ。

源藏。　去年の七月からの大仕事で、陽氣の好いうちはそれほどにも思はなかつたが、寒くなつたら隨分堪へるな。

藤次。　なにしろ品川の沖で、あさから晩まで吹きつ晒しぢやあ遣切れねえ。毎日のことだが實に顫へ上るぜ。

おたき。　さぞお困りでせうねえ。さうして、けふはお休みですかえ。

源藏。　なんだか知らねえが、お上にお祝ひ事があるとか云ふので、けふ一日は總休みさ。

おたき。　それぢやあ命の洗濯に、一日面白く遊べますね。

藤次。　ところが、松の内に遊び過ぎたので、からだは閑でも懐中がお留守だから、どこへ泳ぎ出す元氣もなし、と云つて、家にもゐられねえから、唯ぼんやりとうろついてゐるのさ。

源藏。　おたげえにこんな氣が利かねえことはねえや。

お兼。　でも、みなさんは品川の方に、好いお樂みがあると聞きましたよ。

勘太。　そのお樂みも、錢がなけりやあ相手にしてくれねえ。

長八。　どこへ行つても金の世界だ。

おたき。　おまへさん達のやうな立派な若衆が、お金には不自由なさるんだから、あたし達が貧乏するのは當りまへですね。

源藏。　さう云ひながら内々で貯めてゐる奴さ。

おたき。　ほゝ、御冗談でせう。あたしが今にしつかり貯つたら、ねえ、お兼……。

お兼。　その時にやあ無利息で、みなさん方に融通してあげますよ。

勘太。　そりやああんまり的にやあならねえ。おめえ達の金を借りた日にやあ、座頭金よりひどからうぜ。

長八。　違えねえ。はゝゝゝゝ。

（皆々笑ふ。風の音寒し。七之助の姉お雪、廿歳、貧家のむすめにて、跛足をひきながら出で、店

のまへを通りかゝりて挨拶する。）

お雪。　おかみさん、今日は……。まことにお寒うございます。

おたき。　おや、お雪さん。ほんたうに寒いことねえ、又これからお稽古かえ。

お雪。　はい。お師匠様へまゐります。

源蔵。　おい、おい、姐さん。まあ、寄つて行きねえな。

お雪。　ありがたうございますが、ちつと急ぎますから……。

（お雪行き過ぎんとして石につまづき、下駄の鼻緒が切れる。）

藤次。　それ見ねえ。おれ達にうしろを見せるから、そんなことになるのだ。

おたき。　ほんたうにお困りだらう。まあ、お待ちよ。お兼、ちよいと鼻緒を立てゝお遣りよ。

お兼。　はい、はい。まあ、お雪さん。こつちへお出でなさいよ。

お雪。　いえ、わたくしが立てますから……。

おたき。　そんな遠慮をしないで、こつちへお出でよ。足が不自由の上に、鼻緒が切れちやあ一足も歩けるものかね。お兼、その下駄を臺所へ持つて行つて、立てゝおいでよ。

お雪。　でも、あんまり憚りさまで……。

お兼。　なに、構やあしませんよ。

源蔵。　ほんたうだ、構ふことはねえ。そのお兼といふ女はおいらの女房だから、遠慮無しにどし、どし引つ使つてくんねえ。

お兼。　あら、源さん。おぼえておいでなさいよ。

（源蔵の背を一つたゝき。お兼は下駄を持ちて奥に入る。）

お雪。　とんだ御厄介になつて相済みません。

おたき。　なに、遠慮にやあ及ばないから、下駄の出來るまで、まあ、こゝに休んでおいでよ。

（お雪は會釋して店さきに腰をかける。）

おたき。　もし、皆さん。これがこの近所で評判の孝行剃身屋の姉さんなんですよ。

藤次。　ちやあ、これがあの剃身屋の姉さんか。孝行剃身屋といへば、こゝらでも評判だが、そのおふくろといふのはまだ達者でゐるのかえ。

お雪。　いえ、昨年の秋なくなりました。

勘太。　おふくろはもう死んだのか。そりやあ可哀相なことをしたな。かう見たところが、十九か廿歳だらうが、燻らして置くのは惜いもんだ。

長　八。　だが、なんだか足下が可怪いやうだね。

お　雪。　子供のときに粗相をいたして、生れもつかぬ不具になりました。

源　藏。　でも、そのくらゐの容貌を有つてゐりやあ、少々びつこでも跛者でも構はねえ。隨分世話の仕手もあるだらうが……。

おたき。　それをあたしが、口を酸つぱくして云へて聞かすんですけれども、これでなか〳〵堅いんですよ。なにしろ、裏店に住んでゐて、三味線よりも琴を習はうといふ心意氣なんですから、あたし達とはお宗旨が違ふんですよ。

藤　次。　なるほど、琴を習つてお師匠さんにでもなるつもりか。して、どこへ稽古に行くんだ。

お　雪。　宇田川横町の大橋様へお稽古にあがります。

勘　太。　む〻、あの撿校の家か。琴は上手だと云ふことだが、あいつもなか〳〵の慾張らしいな。

源　藏。　そりやあ知れたことよ。撿校の勾當のと、勿體らし〳〵構へてゐても、つまりは體の好い高利貸だ。

長　八。　それでも撿校はまだい〻が、その手下をはたらく座頭共ぐらゐ、およそ因業なものはねえぜ。

勘　太。　むかしから催促座頭と綽名がついてゐる位のもんだ。どうせお話になつたものぢやあねえや。は〻〻〻〻。

（座頭徳の市、角の市、華表のうちより出で來り、最前よりこの噂を聽きゐたりしが、この時つかつかと進み出づ。）

徳の市。　これ、これ、さつきから默つて聽いてゐれば、催促座頭とは何のことだ。

勘　太。　金を催促してあるく奴が催促座頭……。

長　八。　高利を貸す奴が高利座頭と。

徳の市。　いや、怪からぬことをいふ奴等だ。大橋撿校殿のお屋敷にゐる我々に對して、さやうな不埒を申すと赦さぬぞ。

角の市。　素直に恐れ入つてあやまれば格別、左もなくば係支配に申立て〻、相當の仕置を願ふぞ。

勘　太。　へん、笑はせやあがる。催促座頭に相違ねえから、催促座頭と云つたのが何で惡い。

徳の市。　でも、因業だと申したではないか。

長　八。　それも因業だから因業だと云つたのよ。人の生血を絞るのがお前たちの商賣だ。

角の市。　這奴、いよ〳〵不埒な奴だ。以後のみせしめに屋敷へしよ引いて行くからさう思へ。

徳の市。　さあ、來い、來い。

勘　太。　巫山戯たことを云やあがるな。

（双方云ひ募りて立ちかゝれば、お雪は見かれて支へる。）

お　雪。　あゝ、もし、どちらに怪我があつても惡い。まあ、お待ちなされませ。

おたき。　（起ち上る。）あれ、お雪さん。お前もあぶないから退いておいでよ。源さんも藤さんも唯見てゐないで、早く止めておくれなねえ。

源　藏。　やい、勘太も長八も好加減にしろよ。相手はみんな盲ぢやあねえか。

藤　次。　お前達も眼の不自由なくせに、氣の強いことを云ひなさんな。まあ、まあ、靜にするが可い。

徳の市。　いや、いや、なか〳〵默つてはゐられぬ。さあ、わしと一緒に來ないか。さあ、來い。

（鐘の市は探り寄つて、源藏の胸倉をつかむ。）

源　藏。　えゝ、なにをする。おいらは相手ぢやねえ。

徳の市。　貴樣もさつき惡口を云つた奴に相違ない。なんでもいゝから一緒に來い。

源　藏。　馬鹿を云へ。（突き放すはずみに、徳の市は倒れる。）

徳の市。　うぬ、手出しするからはもう料簡がならぬ。角の市、しつかりしろよ。

角の市。　よし、よし。眼あきに馬鹿にされて堪るものか。

（二人は杖をふり上げて、滅多打に打つてかゝる。こなたの四人も相手になりて、打ち合ひ、つかみ合ふ。）

おたき。　ほんたうに仕樣がないねえ。

（おたきも表へ走り出でて、お雪と共に双方を制すれども、力およばず。唯あれ〳〵と立ち騒ぐ折柄、華表のうちより人入れの親分金杉の清吉、四十歳、神まゐりの歸途にて出づ。）

清　吉。　おい、どうした、どうした。待て、待て。（走りよつて割つて入る。）

源　藏。　やあ、親分か。

藤　次。　とんだところへ來なすつたね。

徳の市。　さあ、どうしても、勘辨がならぬぞ。

清　吉。　まあ、まあ、待ちなせえ。どう云ふいきさつか知らねえが、こゝのところは私に免じて、どうぞ料簡しておくんなせえ。

徳の市。　さういふのは一體誰だ。

清吉。　わつしは金杉の清吉さ。もし、徳の市さん。この寒いのに、何だつてそんなに熱くなんなさるんだ。もう好加減にしたら何うだね。

おたき。　親分、好いところへ來ておくんなすつた。さつきから困つてしまつたんですよ。

清吉。　いつも店の邪魔をして濟まねえ。(子分等にむかひて)ふだんから喧嘩をするなと、あれほどやかましく云つて置くのに、相手に事をかいて、座頭を相手に喧嘩する奴があるものか。

源藏。　ほんたうに世話が燒き切れねえ。

清吉。　なに、喧嘩をしたわけぢやあねえ。私等は止めに出たので……。

藤次。　止めに出たものが摑み合ひをしてゐる奴があるものか。

清吉。　初めは止める積りだつたが、つい其……。

徳の市。　えゝ、引込んでゐろ。(徳の市等にむかひて)もし、お座頭さん。あいつ等はみんな私の子分共ですから、わたしが代りにあやまります。まあ、料簡して遣つておくんなせえまし。

角の市。　では、今の亂暴者はみんなお前さんの子分ですね。

清吉。　さうでございます。

徳の市。　むゝ、よろしい。では、お師匠様にこの次第を申上げて、あらためてお前さんまでお掛合にまゐりますから……。

勘太。　親分に尻を持つて行くことはねえ。

長八。　喧嘩ならおれ達が相手だ。

清吉。　まあ、いゝから默つてゐろ。

徳の市。　さう事が決ればよい。では、角の市。

角の市。　そろ〳〵と行かうかの。

(二人は杖をつきて歩み去る。)

源藏。　座頭の坊なんて云ふものは、惡く執念深えもんだね。

藤次。　撿校の威勢を嵩にきて、なにか文句を云つてくるかも知れねえぜ。

清吉。　來たら來た時のことだ。まあ、打つちやつて置くが可いや。お前達もいゝ加減に油を賣つたら、もう家へ歸れ。こゝらにうろ〳〵してゐると、碌なことは仕出來さねえ。

源藏。　ちやあ、足下の明るいうちに、もう出掛けようか。

藤次。　親分。

四人。　お先へまゐりますぜ。

品川の臺場

清吉。　また途中で喧嘩をするなよ。

四人。　あい、あい。

おたき。　みなさん。お歸りですか。

源藏。　とんだ心配をかけて濟まなかつたが、まあ堪忍してくんねえ。

おたき。　どう致しまして……。是非またお近い中に……。

藤次。　あい。また遊びに來るよ。

（藤次は錢を出して置く。おたきは禮をいふ。）

源藏。　さあ、行くべえ、行くべえ。

（源藏等四人は打連れて去る。）

清吉。　まるで大風の吹いたあとの樣だ。よくも我殺に生れついた奴等だな。

おたき。　おや、うつかりしてゐて、お出花もまだ上げませんでした。

清吉。　なに、可いから構ひなさんな。

（おたきは茶を淹れる。奥まりお兼は下駄を持つて出づ。）

お兼。　お雪さん、お待遠さま……。どうせ巧くは行きませんよ。

お雪。　どうも憚り樣でございました。

清吉。　お兼坊。いつも綺麗だね。

お兼。　あら、金杉の親分……。お久振りでございますね。

お雪。　（下駄をはく。）では、おかみさん。いろ〳〵御厄介になりました。

おたき。　もうお出でか。あの、お雪さん。

お雪。　はい。

おたき。　今の喧嘩のことなんぞは、なるべくお師匠さんの耳に入れない方がよからうよ。

お雪。　はい、はい。御免下さいまし。

（お雪はびつこを曳きて行きかゝる。上の方よりお雪の弟七之助、十八歳、剝身屋のこしらへにて、盤臺をかつぎて出づ。）

七之助。　おゝ、姉さん。これからお稽古に行くのかえ。

お雪。　けふは大層早かつたね。

七之助。　おかげで今日は早仕舞だつたよ。

お雪。　さぞ寒かつたらうね。火鉢には炭團が活けてあるから、家へ歸つたら早く火をおこしてお

當りよ。

七之助。　あい、あい。

（お雪は上の方へあゆみ去る。このあひだに、お雪は茶を汲んで出で、清吉は茶をのんでゐる。七之助は店のまへに來りて挨拶する。）

七之助。　おかみさん。お寒うございます。

おたき。　おや、七之助さん。相變らずよくお稼ぎだね。

清　吉。　ほんたうに若いのに感心な男だ。

七之助。　おゝ、親分さんでございましたか。毎度御贔屓になつて有難うございます。

清　吉。　今そこで話をしてゐたのは、お前の姉さんか。

七之助。　はい。

清　吉。　ねえさんも好い弟を持つて仕合だ。なんでも姉さんを大事にしなくちやあいけねえぜ。

七之助。　はい。

（七之助は思案して、肩にしたる盤臺を下し、清吉の前にひざまづく。）

七之助。　實はあらためて、お宅へお願ひに出なければならないのでございますが、こゝでお目にかかつたのを幸ひに、少々折入つてお願ひ申したいことがございますが……。

清　吉。　なんだか知らねえが、遠慮無しに云ふがいゝや。

七之助。　ほかの事でもございませんが、親分のお聲がかりで、どうかわたくしをお臺場へ遣つて下さいませんか。

清　吉。　なに、お臺場へ行きてえ。（七之助の顔をみる。）品川のお臺場は去年からの大仕事、石川島の寄場人足ばかりぢやあ迚も手がまはらねえので、方々の人入れが御用を仰せ付けられ、おいらも一方をひき受けて、毎日二三百人の人足を入れてゐるが、お前もその仲間へ這入つて、畚で土をかつぐ氣か。

七之助。　はい。世間の噂を聞きますと、今度新規に一朱銀が出來まして、お臺場人足に出るものには、一日に一朱づつ下さるといふ話。わたくしもこの通り、蜆や剝身を賣つてゐましては、ひとりの姉に樂がさせられませんから、どうせお役には立ちますまいが、親分のお情で、お臺場の土をかつがして頂けますれば、姉もわたくしも助かります。

清　吉。　蜆や剝身を賣つてゐちやあ、とても息が吐けねえから、一日一朱の手間がほしさに、お臺場へ行かうと云ふんだな。むゝ。（首をひねる。）

おたき。　横ずつぽうから妾が餘計な口を出すやうだが、七之助さん、そりやあ餘程かんがへ物だよ。なるほど一日に一朱といへば、好い手間賃には相違ないが、お上だつて唯下さるわけぢやあない。好い手間賃をくださるには、また下さるだけのわけがあるんだよ。あの廣い品川の海のまん中へ、石や泥をつんでお臺場をこしらへるといふのは、なか〳〵生優しいことぢやない。土舟はたび〳〵引つくりかへる、人はたび〳〵流されるといふので、毎日人死は絶えないさうだ。親分のまへで云つちやあ何だけれど、慾に眼がくれて、うか〳〵そんなところへ仕事に行つて、もしもの事でもあつた日にやあ取返しが付きやあしないよ。

清吉。　こゝのおかみさんの云ふ通り、一日に一朱といふ相場外れの手間賃を下さるにやあ、又それだけの譯もあるのだ。なにしろ馴れねえ仕事だから、毎日色々な間違えが出來て、幾人死ぬかわからねえ。去年の秋からこの正月までに、おいらの手から入れた人足ばかりでも、五六十人は死んでゐるだらう。きのふは誰が流された、けふは誰が沈んだと、毎日毎日忌な噂を聞かされるので、おいらも實はあぐねてゐるのだ。

おたき。　ましてお前なんぞは年は若し、これまで力業をしたと云ふでも無し、かぼそい身體で荒仕事をして、たとひ流されないまでも、もし煩ひでもした日にやあ、自分ばかりか姉さんも

七之助。　どんなに困るか知れやあしない。まあ、そんなことは止した方がよからうよ。

（七之助は默して聽きゐたりしが、この時、やうやく顏をあげる。）

御深切に色々ありがたうございます。お臺場の仕事の骨の折れるのは、わたくしも豫て聞いてゐますが、肩へ棒をあてゝ一生懸命かせいでも、一日に多寡が百か百五十の儲けでは、諸式の高い世のなかに、姉弟ふたりが三度の膳にむかつて、白いお米は食べられません。まして姉はあの通り、足の不自由な不具者、毎日大橋樣へ琴のお稽古に通ひまして、許しを受けたら師匠を始めるつもりでございますが、それにしても着替へ一枚無いやうな、今の貧乏暮しでは……（なみだを拭ふ。）みなさん、お察し下さいまし。

清吉。　むゝ、わかつた、わかつた。お前の料簡はよく判つたが、それほど姉さんを思ふなら、自分のからだも猶々大事にしにやあならねえ。命賭けのお臺場仕事なんぞに出かけて行つて、もしもの事でもあつた日にやあ、折角の姉さん孝行も却つて不孝になるだらうぜ。かせぐに追付く貧乏無しとやらで、仕なれた仕事を勵んでゐれば、自然に芽をふく時節も來る。一足飛びに好い錢を取らうなぞと、あんまり焦ると遣損じるものだ。

七之助。　それぢやあこれほどお願ひ申しても、きいては下さいますまいか。

清吉。　おいらは固より稼業だから、お前達の五人や十人、遣つてやるのは雑作もねえが、今も云ふやうなわけだから、どうもお前にやあ勧めにくいな。して、一體そりやあ姉さんも承知の上か。

七之助。　いえ、姉にはまだ相談は致しませんが……。

おたき。　そら、御覽な。お前一人がそんなことを云つたつて、姉さんが屹と不承知に相違ないよ。

清吉。　なにしろ、悪いことは云はねえから、もう一遍考へた上にしねえ。

七之助。　はい。

（七之助は默して思案す。華表のうちより以前の勘太、一杯機嫌にて出づ。）

勘太。　やい、やい、長八。なにをしてやあがるんだ。もう日が暮れるぞ。早く來い、早く來い。（後をみかへる。）あゝ、酔つた。酔つた。空腹へ一杯やつたらすつかり酔つてしまつた。（鼻唄。）死んでしまほか、お臺場へ行こか、死ぬにや優しだよ土かつぎ……。あ、こりや、こりや。

おたき。　ほゝ、大變な御機嫌だ。このごろは何處でもあんな唄が流行るんだねえ。

（七之助は矢はり默して聽く。）

勘太。　あ、こりや、こりや。死んでしまほか……。

清吉。　えゝ、好加減にしろ。往來なかで見つともねえ野郎だ。

（清吉は勘太を突き倒す。勘太は倒れて起きられず。お雖はかけ寄つてひき起す。）

（二）

芝宇田川横町、大橋撿校の宅。二重屋體にて、上のかたに床の間、違ひ棚、つゞいて出入の襖あり。すべての結構は普通の旗本屋敷にもまされり。庭には風流なる柴垣、石燈籠などありて、樹振り面白き梅の花は白く咲きみだれたり。

（主人の撿校は五十餘歳、白の袴を着けて、むらさきの蒲團に坐し、曲彔に凭り、丸火鉢を擁して、琴の音に耳をかたむく。七之助の姉お雪は以前のこしらへにて琴を彈きゐる。撿校の娘お照、十八歳、愛娘なれば花やかに粧ひて、父の傍に侍坐し、おなじく耳をすまして琴を聽く。撿校の前にも式のごとくに一面の琴を置く。）

（お雪はやがて琴を彈き終れば、撿校はこゝろよげに肯く。）

撿校。　おゝ、よい、よい。何藝によらず、勵むといふは頼もしいものぢや。このごろは著るしく

上達がみえて來た。

お照。　ほんにさうでございます。此分ではやがて許しを……。なあ、お父様……。

檢校。　もう一息の辛抱ぢや。この上にも精を出さねばならぬぞ。

お雪。　はい。不器用ながらも一生懸命に、毎日お稽古を勵みますれば、惡いところは何のやうにも、お叱りなすつてくださりませ。

檢校。　惡いところを叱つて教へるが師匠の役ぢや。お前があらためて云はずとも、わしは決して遠慮はせぬ。併しこの頃はたしかに上達、わしも世話甲斐があると喜んでゐるぞ。

お雪。　恐れ入りましてございます。

檢校。　時に弟は相變らず稼いでゐるかの。

お雪。　おかげさまで達者で稼いで居ります。わたくしの口から申すも如何でございますが、七之助は御近所でも評判の姉孝行、まだ年も行きませぬのに、朝から晩までよく働いてくれます。

お照。　七之助さんの噂はかねて聞いてゐますが、まだ十七や十八で、商賣を勵み、姉さんを大事にする、よい弟を持つてお前も仕合せと、近所でもみんな羨んでゐます。

檢校。　人は死ぬまで働かねばならぬ。まして若い者は、額に汗をながして働くといふ心掛けが肝要ぢや。わしも三州の片田舍に生れて、盲目不具の身でありながら、一本の杖を力に江戸へ出て、もとより金のたくはへも無し、たのむべき親戚も無し、云ふに云はれぬ苦に苦をかさねて、見えぬ目から血のなみだが湧き出るやうな、口惜さ悲しさ辛さ、その辛抱を仕通して、やう〳〵今の身となつた。わしが心の弱い者であつたら、中途で泣死に死んだであらうよ。不具者でも精かぎり根かぎり働けば、おのづと廣い道へも出られる。まして五體の滿足な人間は、其人のはたらき次第で、どのやうにも出世ができる筈ぢや。お前の弟も心を強う持つて、せい〳〵働けと云ひ聞かすがよいぞ。

お雪。　ありがたい御教訓、弟にもよく〳〵申し聞かせませう。

（奥の襖をあけて、座頭徳の市出で、探りながら座に着く。）

徳の市。　唯今戻りました。

お照。　徳の市、戻つたか。みれば顏の色も常とは違ひ、手の先や頸のまはりにも爪のあと……。

檢校。　もしや途中で喧嘩でも……。

徳の市。　お嬢様、まあお聞きくださいまし。わたくしがお使に出た歸りがけに、角の市と一緒に神

明前を通りますと、人入れの清吉の子分どもが三四人ばかり、茶店に腰をかけて居りまして、やれ催促座頭の、高利座頭のと、さま〳〵の悪口を申しますので、わたくしも腹に据ゑかねて、二言三言云ひ合ふうちに……。

お照。　たうとう喧嘩となりましたか。

お雪。　わたくしもそこに居合せて、梅本のおかみさんと一緒に止めましたが、どつちも肯かぬ氣の人達で、たうとう喧嘩になりました。

徳の市。　おゝ、お雪さん、お前がよい證人だ。なにをいふにも相手は大勢で、ひどい目に逢ひましてございます。わたくしも盲目滅法界に杖をふり廻はして、二三人は確かに打ちのめしてやつたと思ひますが、そのくらゐのことではなか〳〵腹が癒えません。この次第をお師匠様へ申上げて、あいつ等を片つ端から珠數つなぎにして、番屋へ引渡してやらねばなりません。お師匠様はどこに……。

（徳の市は敷居いて起ち上らんとし、有合ふ琴につまづくなど、お雪は支へる。）

お雪。　まあ、お待ちなされませ。お師匠様はそこにおいでなされます。

撿校。　徳の市、さわぐな。わしはこゝにゐる。今聞けば人入れの子分どもが、お前にむかつて何か悪口を云ひ、しかも喧嘩を仕掛けたとやら……。それを相手にして爭ふは抑も不覺ぢや。

徳の市。　云ふ奴にはなんとでも云はして置け。

撿校。　でも、高利を貸すの、人の生血を絞るのと、聞き捨てにならぬことを申しますので……。身不肖ながらわしも大橋撿校ぢや。出るところへ出て申立つれば、町人職人共のふたりや三人、仕置にさせるは易いことぢやが、それもあまりに大人氣ない。高利を貸すと申せども、座頭金の高利は天下御免ぢや。五兩一分の高利を承知の上で、借りる者もあれば、貸すものもある。それを兎かう批判するは、怪しからぬ儀ぢや。……が、まあ、捨てゝおけ。

徳の市。　はい。（澁々控へる）

お照。　お父様もあの様におつしやるから、今日のところは、まあ、まあ、堪忍したがよい。

徳の市。　でも、打つちやつて置くと、癖になりますから……。

お雪。　そこを辛抱なされませ。人間は辛抱が肝心だと、今もお師匠様から承はりました。

徳の市。　さうでござるかなう。

（徳の市は不平ながらに鎮まる。お雪はこれを好き機と歸り支度をする。）

お雪。　いつの間にか日が暮れました。わたくしはこれでお暇申します。

檢校。　あすも時を違へずに來いよ。

お雪。　はい。

お照。　わたしもお前の上達を樂んでゐますぞ。

お雪。　ありがたうございます。

徳の市。　わしもこれからまだ二三軒、催促座頭を勤めねばならぬ。お雪さん、そこまで一緒に行きませうか。

お雪。　わたしが手をひいて上げませう。

徳の市。　實はそこがこつちの附目ぢや。はゝゝゝゝ。どなたも御免くださりませ。

（お雪と徳の市は會釋して、襖をあけて去る。）

檢校。　お照、空模樣はどうぢや。

お照。　どうやら雪にでもなりさうでございます。

檢校。　むゝ、底冷えのする日ぢやなう。

（檢校は火鉢をひき寄せる。お照は炭取より炭をつぐ。）

お照。　徳の市が今の話を、お前はなんと思はれます。大橋の家は八橋檢校のながれを汲む琴の指南、お大名高家や富貴の町人に澤山のお弟子を有つてゐれば、暮しに少しも不自由はない筈。金貸座頭の眞似までして、ひとに憎まれて何となさる。高利の金を貸すことは、もう止めてはどうでございます。

檢校。　金を貸すがなんで惡い。金をためるのが何で惡い。わしは目が無うても金があればこそ、檢校とまで立身した。人間に金のないのは、目の無いよりも不自由なものぢや。一人一家の小さい事ばかりでなく、天下の大事も皆さうぢや。申すも憚りあることぢやが、十一代の文恭院樣、あまり奢侈に長ぜられたので、公儀のお手もとは裕でない。ところへ、今度の黑船騒ぎぢや。海邊の要所々々の御警固やら、お臺場を築くやら、なにや彼やで莫大の御失費……。さあ、その金の出所に困つて、上役人衆もいろ〳〵に苦心して居らるゝやうぢやが、もし平生から心掛けて、御藏に金が積んであつたら、足もとから鳥が起つやうに騒がずとも濟まうものを……。船一艘造るにも、大砲一つ造るにも、先立つものはみな金ぢや。

お照。　金の尊いと云ふことは、わたしもよく知つて居りますが、世間の人に憎まれながら、長者

分限になつたとて、詰らぬことではございませぬか。

檢校。　はゝ、おまへはまだ若い。これからだん〳〵に年を取つて　うき世の味を嘗めるに連れ、金の値もおのづと判つて來るであらう。先づそれまでは何にも云ふな。

（父は一笑に附して取り合はぬに、お照は取付く島もなく、默して炭をつぎ、火箸にて灰をかく。幕の鐘きこゆ。召仕お春、行燈をとぼして奥より出づ。）

お春。　佐藤の番頭さんが見えました。

檢校。　おゝ、傳藏が見えたか。すぐに通せ。

（お春は心得て再び奥に入る。）

檢校。　佐藤の番頭が來たといふ。そこらを少し片附けろ。

お照。　はい、はい。

（お照はそこらを片附ける。襖をあけて、佐藤の番頭傳藏、羽織袴にて出づ。）

傳藏。　どうも嚴しいお寒さでございます。

檢校。　傳藏どの、御主人にもお變りは無いかの。

傳藏。　はい。おかげさまで皆繁昌でございます。

檢校。　それは重疊。わしは少しく風邪の氣味で、この前の稽古日を休んだれば、あすは屹と罷り出ようと存じて居つたところぢや。

傳藏。　御氣分はもうさつぱりとなされましたか。

檢校。　二三日で全快しました。

傳藏。　それは結構でございました。

（奥より召仕は茶を汲んで出づ。）

お春。　お茶一つおあがりなさいまし。

傳藏。　いや、もう、お構ひくださるな。時に憚りながら、お盆をちよいと拜借いたしたうございますが……。

お春。　はい、はい。

お照。　なんの御用か存じませぬが、お盆は丁度これにございました。

（お照は起つて違棚より蒔繪の塗盆を把り出す。）

傳藏。　へい、へい、恐れ入りました。では……。

（召仕をみかへれば、お春は去る。傳藏はふところより服紗につゝみたる紙包みを取出し、盆の上

（に堆がく乗せて、お照のまへに出す。）

傳藏。お嬢様。はなはだ失禮でございますが、これは新規に吹きまして、昨日から通用になりました一朱銀、皆様のお目にかけてくれいと、主人からの申付けでございました。

お照。いつも〳〵頂戴物ばかりで恐れ入りまする。

檢校。なに、新吹きの一朱銀が通用に相成つたと……。お照、これへ持て。

お照。はい。

（盆に乗せたるまゝ、父の前にさゝげ出づれば、檢校は探りながら其のひとつを把りて、先づその面を探り、更に手掌にのせて重量を測り、眉をひそめる。）

檢校。傳藏どの。

傳藏。へい。

檢校。大分重量が輕いやうぢやの。

傳藏。いえ、さうでもございませんが……。

檢校。お照。これを緣側に投げてみろ。

お照。はい。

（お照は緣側に出で、試みに銀を緣におとす。檢校はその音に耳を傾ける。）

檢校。案の通りぢや。傳藏どの、今度の銀には何を詰められた。

傳藏。へい。

（傳藏はすこしく返事に困つてゐる。お照はもとの座に復りて、銀を父にわたせば、檢校は再び手に測る。）

檢校。銅で無し、鐵でなし、瀬戸物の破片など混ぜられたか。

傳藏。まさかそんなことはございますまい。

檢校。いや、さうでない。通用の銀に瀬戸をまぜるのは、今に始まつたことでなく、天保度にも已にその例がある。但しその砌には、まことの瀬戸物を細かに碎いて、よく搗きまぜて餡にしたのぢやが、今度のは恐らくまことの瀬戸ではあるまい。世間にありふれた貧乏徳利のたぐひを、荒く碎いて搗きまぜたものであらう。

傳藏。え。

檢校。はて、眼は見えんでも私にはよく判る。こなたの主人は公儀の金吹御用をうけたまはる佐藤の家ぢや。かやうな玩具同様の金銀を作つて相濟むと思ふか。

傳藏。　お叱りでは恐れ入りますが、これは銀座の役人どもが私の處置ではございませぬ。なにを申すも近年の御失費つゞきで、上の御手許御逼迫の折柄でございますれば、自然その様な儀にも相成りますので……。

檢校。　む、それは私も察してゐる。今も云はれた通り、彼の黒船騒ぎで近年は御失費つゞきの上に、このたび品川沖に十一ケ所のお臺場を築かるゝ。その費用に差支へて、新に吹かれたのが卽ちこの一朱銀ぢや。右様の次第であれば、どうで良い銀は出來ぬものと、わしも初めから推量してゐたが、さりとは餘りに悪い銀ではないか。このやうな銀が世間に通用しては、世はいよ〳〵傾くばかりぢや。

お照。　たとひ性の悪いお銀にしても、一朱が一朱に通用すれば、人の難儀になるでも無し、別に差支へはございますまい。

檢校。　なるほど一朱は一朱ぢやが、一朱の値のないものを一朱として通用すれば、これまで一朱で購へた品は、八百となり二朱となり、諸式高直になるは見易い道理ぢや。遠からず物價は次第に騰貴して、諸人難澁の時節が來るであらう。われ〳〵も覺悟せねばならぬぞ。

傳藏。　うけたまはれば、先づそんな理窟でございますな。さうでなくても去年以來、諸式はあがる一方で、米は勿論、湯錢はあがる、髮結錢はあがる、炭薪はあがる、味噌醬油はあがるといふ始末でございますが、又この上に騰つては下々のものは堪りますまい。

お照。　ほんに困つたものでございますな。

（この時、下のかたの庭口より黒の覆面したる浪士一人、座頭角の市を追立てゝ出づ。）

浪士一。　さあ、主人の居間へ案内いたせ。

角の市。　はい、はい。

浪士一。　ぐづ〳〵してゐると、叩つ斬るぞ。

角の市。　はい、はい。唯今御案内申します、

（角の市は顔へながら案内して來る。お照も傳藏もおどろく。）

お照。　とれ、角の市。そのお方は……。

角の市。　なんだか存じませんが　だしぬけに庭口から這入つて來て、お師匠様のところへ案内しろ、ぐづ〳〵すれば叩つ斬ると云ふのでございます。

（この時、内の襖をあけて、おなじく覆面の浪士二人、その一人は召仕お春を引立て、他の一人は抜刀をたづさへて出づ。）

品川の臺場

浪士二。　さあ、主人はどこに居る。

浪士三。　案内しろ。

（お照と傳藏はいよ〳〵驚く。角の市とお春は顫へてゐる。撿校は自若としてゐる。）

傳藏。　あゝ、もし、皆さん。まあ、お靜になすつて下さいまし。あなた方の御用とおつしやるのは一體何ういふことでございます。

浪士一。　用といふのはほかでも無い。黑船擊ち攘ひの軍用金を借りにまゐつた。

傳藏。　え。

浪士二。　其方共も知るごとく、近年諸外國の黑船出入してわが國をさわがすは、不屆至極。

浪士三。　われ〳〵同志を驅集めて、かれらを擊ち攘ふ所存であるが、なにぶんにも軍用金不足のために當家へ無心にまゐつた。

傳藏。　して、どのくらゐ御入用でございますな。

浪士一。　三人に對して三百兩。

傳藏。　え。

浪士一。　何事も國の爲だ。耳をそろへてこれへ出せ。

浪士二。　兎かう申さば軍の血祭、われ〳〵にも覺悟があるぞ。

浪士三。　命のあるうちに金を出せ。

三人。　出せ、出せ。

（三人は刀を拔き閃めかして詰め寄る。）

傳藏。　でも、それは餘りの御無體……。

浪士一。　えゝ、やかましい。引込んでゐろ。

（刀を眼の前へ突き付ける。傳藏恐れてあとへ退る。）

浪士一。　かやうな奴等は相手にならぬ。おゝ、それに居るが主人の撿校であらう。

浪士二。　唯今も云ひ聞かした通りの次第だ。

浪士三。　軍用金を早く出せ。

（三人は撿校を取圍みて脅迫す。撿校は默して答へず。）

浪士一。　貴樣は眼ばかりでなく、耳もきこえぬか。

浪士二。　われ〳〵は斯樣な切物を持つて居るのだぞ。

（刀にて撿校の頰を打つ。お照はたまらず割つて入る。）

お　照。　まあ、お待ちくださりませ。もし、お父様。あの様におつしやつてゐるものを、お前はなんとか返事をなされぬか。

檢　校。　(はじめて口を開く。)三百兩といへば大金ぢやが、貸せといふなら貸しも仕ようよ。しかし人には禮儀作法がある。たとひ公儀の御用金でも、筋によつては御辭退申すこともある。ましてこれは私の軍用金ぢや。徒黨を組んで人家へふみ込み、双物を閃かして、人を嚇すなどとは、押借か强盜も同樣。まことの武士の所行であらうか。さりとては苦々しい。(あざ笑ふ。)

浪士一。　なに、我々を押借だと……。

(三人詰めよる。お照は遮る。)

檢　校。　はて、騷がしい。金は今貸してやる。二百兩や三百兩のために、命を取られて堪らうかい。はゝゝゝ。それ、お照。數をあらためて持つて來い。

お　照。　はい。

(お照は起つて、棚の手文庫より百兩ざつみ三個を持ち來り、父の手にわたせば、檢校はうなづく。)

檢　校。　今聞いてゐれば、三人に對して三百兩と云うたな。では、一人づつこれへ出られい。

浪士一。　むゝ。

(浪士の一人すゝみ出る。檢校は百兩包みをやる。)

檢　校。　その次は……。

浪士二。　拙者でござる。

(檢校はこれにも百兩包みをやる。)

浪士三。　その次は手前でござる。

(檢校はこれにも百兩包みをやる。)

浪士一。　さすがは大橋檢校と世に聞えたるだけあつて、盲人ながらも好い度胸だ。では、各位。

浪士二。　もはや立去るといたさう。

浪士三。　承知いたした。

浪士一。　檢校、屋敷をさわがして氣の毒であつた。

(浪士等は金を懷中し、一人はもとの庭口より、他は襖をあけて去る。皆々ほつとしてあとを見送る。)

傳藏。まだ宵の口だのに、とんでもない奴等が押込んでまゐりましたな。

お春。手々に抜刀をふりまはして、怖いことでございました。

角の市。ましてわたくしは眼は見えず。何うなることかと顫へてゐましたが、どなたにもお怪我がなくて、先づおめでたうございました。

お照。世の中がだん〳〵騒しくなるに連れて、斯ういふことが殖えて來ませう。おたがひに油斷はなりませぬな。

檢校。それを今更いふことか。油斷大敵とは三つ兒も知つてゐる諺ぢや。二百年來の太平に狎れて、上下ともに油斷してゐたればこそ、降つて湧いたやうな黒船騒ぎに、俄に眼が醒めてうろたへ廻る。それに連れて世は騒がしくなる。物價はあがる。盜人は殖える。實に困つたものぢやなう。

（遠方にて半鐘の音きこゆ。）

傳藏。や、どこかに火事があるやうでございますな。

角の市。おひ〳〵に又、つけ火が流行り出すかも知れませんよ。

お照。押借やどろばうが流行る、放火が流行る。この分では夜もおち〳〵は寢られますまい。

檢校。世は物騒になるばかりぢや。

（檢校は嘆息す。いづれも顔を見合はして不安の體。傳藏はそは〳〵して歸り支度をする。半鐘の音遠くきこゆ。）

——幕——

第二幕

（一）

芝、片門前の裏家。平舞臺にて、上のかたの壁に琴が立てかけてあり。正面は三尺の佛壇、その下は押入。つゞいて破れ障子の出入口、下のかたは破れたる風壁。これに隣りて臺所あり。この家には門口無し、すべて臺所より出入りするものと知るべし。二月初旬、けふは初午祭にて、この家の傍らより奥にかけて所々に丸太をたて、地口行燈をかけ連れたり。太鼓の音賑はしくきこゆ。

（七之助の姉お雪は病後の體。火鉢のまへにて藥鍋をあたゝめゐる。下手の奥の方より長屋の女房

おとめ、小ざっぱりしたる着物をきて、狐の面を持ちたる男の兒の手をひき、片手に重箱の包みをさげて出づ。）

おとめ。　はい、御免なさいよ。みんなお留守かえ。

お雪。　はい、はい。（起つて外をみる。）おや、をばさん。さあ、どうぞ……。

おとめ。　ぢやあ、御免なさいよ。

（おとめは男の兒を連れて、臺所より内に入る。）

お雪。　徳ちやん、よくお出でだね。おゝ、大變好い衣が出來ましたね。

おとめ。　けふは初午だから好い衣を着せてくれと、朝から強請んで仕樣がないんですよ。時に七之助さんは……。臺所に盤臺があるやうだが、もう歸つて來なすつたのか。

お雪。　はい。今歸るとすぐにお稲荷樣へおまゐりに行きました。

おとめ。　それぢやあ路地のあたりで逢ひさうなものだが……。（云ひつゝ包みをあけて重箱を取り出す。）これはほんの少しですが、初午のおしるしにお強飯を炊きましたから。

お雪。　毎度頂くばかりで恐れ入ります。

男の兒。　阿母さん、早く歸らうよ。

おとめ。　早く歸つて太鼓を叩きたいのだらう。大きい兒と喧嘩をするんぢやないよ。

お雪。　徳ちやんはおとなしいから大丈夫でせう。

おとめ。　どうして、どうして、いたづらで困るんですよ。ぢやあ、お雪さん。重箱はそのまゝにして置いて、後に返してください。

七之助。　どうも有難うございました。

（おとめも挨拶して臺所口を出る。下手の奥より七之助出づ。）

おとめ。　おゝ、をばさん。

七之助。　今までお前さんのとこでお邪魔をしてゐたんですよ。

おとめ。　さうでしたか。まあ、ゆつくりしなければ可いのに……。

七之助。　又ゆつくり遊びに來ますよ。

おとめ。　早く行かうよ。

男の兒。　あいよ、うるさいねえ。

（おとめは兒の手をひきて去る。七之助は内に入る。）

お雪。　お稲荷樣へおまゐりをして來たかえ。

七之助。　よく拜んで來たよ。毎年のことだが、初午はなか〳〵賑かいねえ。

お　雪。　今お長家のをばさんが、初午のお强飯を下すつたから、温かいうちに喫べたらよからう。お湯も丁度沸いてゐるよ。

七之助。　おいらはまだ腹が飽いから、姉さん澤山喫べるがいゝよ。

お　雪。　なに、わたしはこれからお藥を飲むんだから、お前まあ先へおあがりよ。今、箸とお茶碗を持つて來てあげるから……。

（お雪は臺所より箸と茶碗を持ち來る。）

七之助。　姉さん。ふだんは兎も角も、せめて初午とかお彼岸とかいふ時には、お長屋並の事がしたいね。

お　雪。　初午でもお彼岸でも、いつも御近所から貰ふばかりで、滿足に御返禮をしたことも無し、お長屋の人たちと顏を合はす度に、なんだか肩身が狹くてならない。

七之助。　おいらでさへ然う思ふんだから、姉さんなんぞは女のこと、なほさら忌な思ひをするだらうね。いくら一生懸命にかせいでも、貧乏はやつぱり貧乏、おいらはもう忌になつてしまつた。

お　雪。　そんなことを云はないで、早くお强飯でもおあがりよ。さあ、お湯もこゝにあるよ。（藥罐より湯を注いでやる。）

七之助。　ひとから貰つた强飯ぢやあ、食つても喉に支へるだらう。

（七之助は重箱をみて嘆息す。お雪もぢつと俯向く。）

七之助。　今もそこでお長家のおとめさんに逢つたら、をばさんも小兒も初午でみんな小さつぱりとした髏裁をしてゐたが、姉さんもおいらも子供の時から、着物らしい着物を一度も着たことはないね。

お　雪。　おたがひに運が惡いんだから仕方がないよ。

七之助。　死んだお父さんも正直一方、かせぐ一方であつだが、それでも一生貧乏してしまつた。おいらも肩揚の取れないうちから、重い盤臺をかついで、傍目もふらずに稼いでゐるが、いつまでもこの通りだ。ほんたうに詰らないな。

（お雪は答へず、竊かに涙をぬぐひつゝ藥をのむ。）

姉さん。このあひだの晩、大橋樣へ押込みが這入つて、ぬきみで大勢を嚇かして、三百兩盜んで行つたさうだね。なるほど、この世智辛い世のなかに、惡い事でもしなけりやあ金

儲けはできまいね。やつぱり彼奴等は偉いんだ。思ひ切つたことをするだけ偉いんだなあ。

お　雪。（弟の顔を屹とみる。）七之助。お前とんでもない料簡を出しちやあいけないよ。

七之助。とんでもない料簡とは。

お　雪。たとひどんなに貧乏しても、正直は身の守、決して曲つた根性などを持つてはなりませんよ。このあひだの晩、お師匠さまのお屋敷へ這入つた泥坊を、おまへは褒めてゐるやうな口ぶりだが、冗談にも程がある。泥坊がなんで偉からう。もし偉ければ、おまへも眞似をする氣かえ。

（少しく氣色をかへて詰め寄れば、弟はあわてゝ遮る。）

七之助。なに、何、決してそんなことはありやあしねえ。なんでおいらが泥坊の眞似をするものか。おいらが偉いと云つたのは、思ひ切つたことをするから偉いと云つたんだ。そこで姉さん。このあひだから話してゐるお臺場人足の一件だがね。

お　雪。又それを云ひ出したのかえ。

七之助。金杉の親分にも意見をされ、又お前にも叱られたが、おいらは何うしても一日に一朱の金がほしい。一日に一朱づつの稼ぎがありやあ、こんなに貧乏してゐないでも濟むんだ。姉さんにも最つと綺麗な着物を着せられるんだ。おいらは何うかんがへても貧乏は忌だ。と云つて、まさかに泥坊もできねえから、命懸けでお臺場の仕事に行つて、おまへにも樂をさせ、おいらも少しは息を吐きたいんだ。え、姉さん。後生だから承知して、おいらをお臺場へ遣つてくんねえよ。

（七之助は思ひ入つて云ふ。お雪は惱ましげに額をおさへて俯向く。七之助は摺寄つて姉の顔をのぞく。）

七之助。え、姉さん。どうしてもお前、不承知かえ。

お　雪。まあ、お待ちよ。わたしももう一度かんがへて見るからさ。（猶思案してゐる。）

七之助。それとも何うしてもいけねえと云ふなら、おいらあもう寧そ……泥坊にでもなつた方が優しだ。

お　雪。え。

七之助。だからよ。お臺場へ仕事に遣つてくんねえよ。

（お雪は返事に困つてゐる。この以前より矢場の女房おたき、門口に來りて内を窺ひゐる。）

おたき。御免なさいよ。

七之助。　はい、はい。どなた……。（臺所口に出る。）やあ、おかみさん。……おい、姉さん。梅本のおかみさんが來なすつたよ。

お雪。　おや、さう。

（お雪も起つて出で迎へる。）

お雪。　相變らず穢なうございますが、どうぞこちらへ……。

おたき。　別に用があるわけぢやあないが、實は初午で、この裏のお稲荷様までおまゐりに來たから、ついでにちよいと寄つて見たのさ。時にお雪さんはなんだか血色がよくないやうだが、どうかおしかえ。

お雪。　先月の末から風邪を引きまして、五六日ばかり臥せりました。

おたき。　そりやあ不可なかつたね。このごろは惡い風邪が流行るから、用心おしよ。（烟草をのみながら。）七之助さん。お前はどうしてもお臺場へ行きたいと云ふのかえ。

七之助。　ぢやあ、聞いておいでしたか。

おたき。　門で立聞きといふと芝居のやうだが、なんの氣無しに門へ來て、おまへさん達の話をちらりと聞いたのさ。

お雪。　わたくしも困つてゐるんですが、おかみさん、何うしたもんでせうね。

おたき。　さあ、このあひだも妾が色々意見したが、それほど當人が行きたいと云ふなら、まあ遣らして見るもよからうよ。兎もかくも二三日仕事に行つてみて、あんまり辛かつたら止める分のことさ。

お雪。　さうですかねえ。

おたき。　なんの彼のと云ふものゝ、まつたく貧乏は辛いからねえ。

七之助。　おかみさん、お察しくださいまし。

おたき。　あゝ、そりやあ妾も察してゐるよ。困るのはお前さん達ばかりぢやない。黑船の騷ぎから世間はなんだか騷々しく、今にも軍でも始まるやうに云ひ觸らすので、氣の早い人は世帶を仕舞つて、遠い田舍へ引込んでしまふのもある位。よれば障れば不景氣の話ばかりで、あたし達の店も休み同樣さ。おまけに諸式は高くなるので、下々はいよ〳〵難澁するばかり。このごろ流行る唄ぢやあないが、死んでしまはか、お臺場へ行こか、死ぬにや優しだよ土かつぎ……。死ぬには優しと思案をきめて、お臺場へ行つてみるのも可いかも知れないよ。

七之助。　おかみさんのおつしやる通り、かういふ世の中になつて來ちやあ、よつぽど覺悟をせにやあなりません。

おたき。　あたしも一旦は止めたくらゐだから、今でも決して勸めやあしないけれど、この分で押して行つたら、世は惡くなるばかりで、お前さん達も困るだらうからねえ。お臺場の仕事といふのは、この先何年つゞくか知らないが、一時凌ぎに行つてみるのも可いかも知れない。だが、なにを云ふにも海の上で命懸けの仕事をするんだからね。そのつもりで能く氣をおつけよ。

お雪。　さあ、それが心配でなりません。天にも地にも姉弟ふたり、この兒に若しもの事でもありましたら、わたくしは何うすることも出來ませんから……。

おたき。　さう云はれると、こりやあやつぱり考へ物で、あたしも返事に困るがね。

七之助。　姉さん、そんなに心配することはありやあしねえ。おいらだつて子供ぢやあ無し、命の惜いぐらゐは知つてゐるから、用心の上にも用心して、めつたに死ぬやうなことはしやあしねえ。なんでも人間は運次第で、運が惡けりやあ疊の上でも怪我をする。運がよけりやあ火水のなかでも助かることもある。先を案じてゐた日にやあ限がないよ。ねえ、おかみさん。

おたき。　まあ、さう云へばそんなものさ。

お雪。　それほど行きたいと云ふのなら、わたしも無理には止めないが、お臺場へ仕事に行くと、みんな海へ流されて、十人にひとりは屹と死ぬといふ話。お前もそのつもりで氣をつけておくれよ。可いかい。

七之助。　何、おいらあ子供のときから芝浦に育つて、泳ぎを知つてゐるから大丈夫だ。ちやあ、これからすぐに行つて來よう。だが、このあひだの樣子ぢやあ、金杉の親分も容易に肯いてくれさうもないな。

お雪。　お前、もうすぐに行くのかえ。

七之助。　まだ午前だから、これから行けば一日の手間は貰へるだらう。たゞ遊んでゐても無駄なことだ。

お雪。　ちやあ、お辨當を持つて行かなくつちやあなるまい。おゝ、こゝに貰つた强飯がある。今日はこれで我慢して置いておくれよ。わたしが今、お結飯にして上げるから……。

七之助。　あい、あい。

（お雪は強飯の重箱を持ちて臺所へゆく。）

おたき。　もし親分が内にゐなかつたら、すぐに高輪の仕事場へ行つて御覽よ。一度は止めるかも知れないが、むかうだつて幾らでも人手の要るところだから、使つてくれるに相違ないよ。

七之助。　はじめの内は些と骨が折れるかも知れませんが、馴れゝばむづかしいこともありますまい。

おたき。　まあ、なんでも我慢が肝心さね。

（初午の太鼓の音きこゆ。下手の奥より盛裝したるお照は召仕お春を連れて出づ。）

お照。　お雪の家といふのはこゝかえ。

お春。　お嬢様。路は狹し、溝板はあぶなし、おまけに兩方の庇からは雪どけの雨だれは落ちる。氣をおつけなさらないと、お召物が臺無しですよ。隨分ひどい裏でございますね。

お照。　これ、靜にしや。

（案内せよと眼で知らすれば、お春は心得て臺所口より聲をかける。）

お春。　もし、お雪さんはお内ですか。

お雪。　はい。（外を見る。）おや、お春さん。お嬢様もどうして、あ、こんな穢いところへ……。兎もかくもお上り下さいまし。

おたき。　誰かお客様のやうだよ。

（七之助は起つて外をうかゞひ、これも驚く。）

七之助。　おゝ、お嬢様……。まあ、どうぞこちらへ……。

（お照はお春の持つたる風呂敷包をうけ取る。）

お照。　お前はもう歸つてもよい。お父様にはすぐお跡からまゐりますと申しておくれ。

お春。　はい、はい。かしこまりました。

（お春は會釋して去る。）

七之助。　さあ、どうぞお通り下さいまし。

（お照は會釋して内に入る。かくと見るよりおたきは臺所へゆく。）

おたき。　お雪さん、お拵當はあたしが拵へてあげるから、お前はあつちへ行つて、お客様に御挨拶をおしよ。

お雪。　では、まことに濟みませんが……。

おたき。　あゝ、あたしが上手にこしらへてあげるよ。

（お雪はこなたへ來りて、うや〳〵しく手を支へる。）

お雪。　お嬢様。どうも失禮を致しました。時に病氣はもう快いのかえ。

お照。　わたしこそ用の邪魔をしてお氣の毒でした。

お雪。　はい。かぜを引きまして、五六日臥せりましたが、昨晩あたりから熱も取れましたので、けふは無理にも起きて居ります。

お照。　あんまり無理をしないがよい。かぜを惡くこじらせると、とんだ大事になりますぞ。これまで雪が降つても、雨が降つても、一日も稽古を缺かしたことのないお前が、五六日もつづけて休むといふのは、よく〳〵のことに相違あるまいと、お父様も案じてゐられましたが、早く癒つてまあ目出たい。（風呂敷包みを披く。）これは詰らぬものながら、病氣見舞の印までに……。（菓子の折を出す。）

お雪。　これはまあ、お心にかけられまして有難うございます。日頃から一方ならぬ御世話を受けまする上に、またこのやうな御心配をかけましては、お禮の申上様もございませぬ。

七之助。　まことに恐れ入りましてござります。

お照。　そのやうにお禮を云はれては、却つてこちらが迷惑します。

（云ひつゝお照は絶えず七之助に眼をそゝぐ。時の鐘きこゆ。）

七之助。　おゝ、もう四つだな。

おたき。　（臺所にて。）七之助さん。もうお辨當は出來てゐるよ。

お雪。　どうもお世話様でございました。

七之助。　ぢやあ、御免を蒙つて、俺はもう行くとしようか。

お照。　お辨當を持つてどこへ……。

七之助。　え。（お雪と顔を見あはせる。）

お雪。　いえ、品川まで用達にまゐります。

お照。　實はわたしもこれから高輪まで行かねばなりませぬ。

七之助。　お臺場でも御見物にいらつしやいますか。

お照。　いえ、御殿山下の佐藤の別莊まで……。けふは佐藤のむすめの稽古日で、お父様はお出向きになる筈。丁度今は梅の盛ゆゑ、わたしにも一緒に見に來いと誘はれました。

七之助。　銀座の佐藤の別莊ぢやあ、さぞ立派でござりませうな。

お照。　大金持の佐藤の普請、お大名衆の下屋敷よりも、遙かに立派だと云ひまする。

七之助。　（嘆息して。）あゝ、それだから貧乏は忌だといふのだ。

お雪。これ、お嬢様の前で……。お前はもう行くがよい。

七之助。では、お嬢様。御免くださりませ。

お照。わたしも表まで一緒にゆきませうか。

お雪。まだ宜しいではございませぬか。

お照。いえ、表に駕籠が待たしてある。わたしももうお暇をしませう。

お雪。お出がけを無理におひきとめ申すも如何。では、いづれお禮に伺ひます。

お照。からだが癒つたら一日も早く稽古に來や。

お雪。ありがたうございます。

（七之助は臺所に來り、おたきに挨拶して割籠の辨當をうけ取り、お照の履物を直して外へ出る。お雪はお照を送りて出づ。長屋で歌ふ端唄の聲きこゆ。）

唄〽惚れて通ふに何怖からう。

（お照は履物をはきながら、うつとりと聽き入る。）

おたき。お長屋で大分粋な聲がきこえるね。

お雪。けふは初午で、どこかにお客でもあると見えます。

お照。ほんたうにお賑やかですね。

唄〽やみの夜道をたゞ一人。

（お照はゆきかけてつまづく。七之助は思はずその手を取る。）

お雪。雪どけで路が惡うございますから、よく氣をつけて入らつしやいまし。

おたき。七之助さん。いつそ路地の口まで手をひいて行つてお上げよ。

七之助。え。

おたき。お嬢さんも其方が可いでこざんせうね。

お照。でも……。

唄〽先きや左程にも思やせぬのに、こちや登りつめ。

（お照は嬉しく恥かしき風情にて、うじ〳〵してゐる。）

おたき。何、ほかに誰も見てゐやあしません。七之助さん、しつかりと手を曳いておあげよ。

唄〽山を越えて逢ひにゆく。

（七之助も極り惡さうにお照の手をひきて、ぬかるみを渡りつゝ下手の奥に入る。おたきはお雪の肩をたゝく。）

品川の臺場

おたき。　お前さん達は運が向いて來たんだよ。

お　雪。　え。

おたき。　今のふたりの樣子を御覽な。男の方はどうだか知らないが、お嬢さんの方では確かに氣あり名古屋さ。相手は名代の檢校の娘。こつちから巧く持掛けりやあ、おまへさん達は浮び上るんだよ。

お　雪。　あれ、おかみさん、とんでもない。なんでお嬢樣が弟なんぞに……。

おたき。　おまへさんも野暮だね。戀に上下の隔てはないと、昔から相場が決まつてゐるんぢやあないか。

お　雪。　でも、そんな筈が……。

おたき。　ないと云つても論より證據さ。かういふ方の鑑定なら、はゞかりながら妾の方が商賣人だよ。

（お雪は半信半疑にて差うつむく。下手の奥より座頭徳の市は杖をつきて出づ。）

徳の市。　もし、お雪さんはおいでかな。

お　雪。　はい。（出る。）おや、徳の市さん。

徳の市。　この裏の大工さんまで鳥渡催促に來たので、その足ついでに寄りました。時に七之助さんは……。

お　雪。　今そこまで參りました。

徳の市。　それは丁度可い。では、御免くだされ。

（徳の市は探りながらにつか〳〵と内に入る。おたきは默つて見てゐる。徳の市は座につく。）

徳の市。　けふは大分あたゝかになりましたな。

お　雪。　ほんにお暖かになりました。

徳の市。　七之助さんは家にゐず。なんぼ晝間でも、ひとり法師では寂しうござらうな。

お　雪。　いえ、馴れてはそれ程でもございませぬ。

徳の市。　寂しければ、わしが時々に遊びに來ますぞ。

（探りながらに摺寄る。お雪は返事に困つてゐる。）

徳の市。　これ、お雪さん。かう云つては失禮だが、おまへさんは實に琴が上手だ。お師匠樣も日ごろから褒めてゐられますぞ。

お　雪。　どう致しまして、わたくしのやうな不器用者が……。

徳の市。　いや、いや、決して卑下することはない。誰がなんと云つても、お雪さんは名人上手だ。わしもお前の琴の音を聽いてゐると、なんとなく恍惚して來て、あゝ斯ういふ女子を女房に持つたならば……と、思ふことも度々ある。

（お雪はいよ〳〵困つてゐる。おたきは笑ひを忍んで聽いてゐる。）

徳の市。　そこで、物は相談だが……。これ、お雪さん、なぜ返事をしなさらぬ。これ、お雪さん。

（探り寄らんとする時、おたきは竊と忍び寄りて、徳の市の耳を摘みながら引立てる。徳の市は顏をしかめて起つ。）

徳の市。　あ、これ、お雪さんにも似合はぬ。惡いたづらをさつしやるな。いけない、いけない。

おたき。　（笑ひながら。）お氣の毒さま。人が違ひますよ。

徳の市。　え、誰だ。誰だ。（俄にうろたへる。）梅本のおかみさんのやうな聲だが……。

おたき。　まあ、そんなものですね。

徳の市。　え。誰もゐないと思つたら、こりやあ飛んだ大しくじりだ。

おたき。　おまへさんもなか〳〵色師だねえ。

徳の市。　いや、面目ない。（頭をかゝへる。）他言は御無用。拜む、拜む。

（徳の市は汗をふきながら拜む。おたきは噴き出す。お雪も思はず笑ふ。端唄の聲又きこゆ。）

（二）

品川の御殿山下、銀座役人佐藤の別莊。豪奢をきはめたる屋敷の構へにて、庭には風雅なる四阿あり。形面白き石燈籠などありて、老木若木の梅は今や滿開の體なり。うしろには木立、築山、泉水などを隔てゝ、御殿山高く聳ゆ。

（佐藤の女房お豊の案内にて、お照は以前のこしらへ、梅をみながら出づ。あとより佐藤の召仕の女二人附添ひ出づ。琴の音遠くきこゆ。）

お照。　いつもながら廣いお庭に、よくお手入れが屆きまする。

お豊。　何分にもこの通りの廣い地所でござりますから、いくら植木屋どもにやかましく申しましても、なか〳〵掃除がゆき屆きませぬ。當年は餘寒が長かつたせゐか、梅もいつもよりは遲く咲きました。

お照。　ほんに今が丁度見頃でござりますな。

お豊。　お前もおくたびれでござりませう。まあ、これへお掛けなされませ。

（お照とお豐は凡阿の縁に腰をかける。）

お　照。　わたくし共には一向わかりませぬが、どの梅も面白い樹振り枝振り、定めて名のある花でござりませう。

召仕一。　遠くは大和、近くは青梅から、お金にあかして手を廻し、よい種をお取寄せになつたとか

召仕二。　承はりました。小村井の梅屋敷にも、龜戸の天神様にも、これほどの名木はすくないと、どのお方もお褒めなされまする。

お　豐。　内の者の口からそのやうに褒め立てゝは、お客様は御挨拶にお困りなさらう。ちと嗜んだがよい。ほゝゝゝゝ。

お　照。　いえ、いえ、このやうな見事なお花は、ほかではとても見られますまい。お庇さまで今日はよい保養を致しました。

お　豐。　もう少し暖かくなりますと、桃も櫻も咲きまする。裏の畑には菜の花も咲きまする。その節には是非またお遊びにお出でくださりませ。

お　照。　はい、又お邪魔に伺ひまする。

（皆々庭へながめてゐる。主人の佐藤半左衛門、四十前後、羽織袴にて出づ。）

半　左。　おゝ、お嬢様。これにお出でなされましたか。これ、お豐。今こゝへ安藤の殿様がお越しになるぞ。

お　豐。　安藤の殿様が何うしてこゝへ……。

半　左。　先觸れも無しに不時のお越だ。ふだんから氣輕の殿様。大方いつものお忍びであらうよ。

お　照。　では、わたくしがこゝに居りましては……。（起ちあがる。）

半　左。　さあ、お氣の毒ながらあちらの座敷へお引移りくださりませ。（召仕等を見かへる。）それ、御案内申せ。

召　仕。　はい、はい。

お　豐。　では、こちらへお出でなされませ。

（お豐は先に立ちて、お照と召仕等は上のかたの木の間に入る。下手より召仕一人が、帽を持ちて出づれば、半左衛門は指圖して、あづまやの縁に敷かせる。下手より安藤織部正、四十二三歳、三千石の旗下、割羽織、野袴、大小にて、陣笠を持ちて出づ。あとより家來横井源五郎、廿二三歳、おなじく野懸けのこしらへにて出づ。）

織部。　ほう、相變らず庭は綺麗だなう。

半左。　御賞美では恐れ入りまする。庭さきで失禮ではござりまするが、野懸けの御裝束でゐられまするので、わざとこれへ御案内申上げました。

織部。　おゝ、野懸けのこしらへを致して居れば、座敷へ通るは却つて窮屈。こゝがよい、こゝがよい。

（織部正は縁に腰をおろせば、源五郎はその側に控へる。）

半左。　して、今日はどちらへお忍びでござりました。

織部。　例のお臺場の件について、阿部勢州と打合せの儀もあり。且は各陣屋を見まはりの爲に、品川高輪を一巡してまゐつたが、まるで戰場も同樣、どこの陣屋へまゐつても湯も茶もない。いや、酷いことであつたぞ。はゝゝゝ。就ては茶を一服所望のために、當家へ押掛客にまゐつた。

半左。　ようぞ御立寄りくだされました。粗茶一服、早速差上げるでござりませう。先づゆるゝと御休息なされませ。

（奥にて琴の音きこゆ。）

織部。　琴の音がきこゆるな。

半左。　はい。今日はむすめの稽古日で、大橋撿校殿がみえて居りまする。

織部。　大橋撿校がまゐつて居る……。それは丁度幸ひだ。安藤織部が逢ひたいと撿校に申してくれ。

半左。　御用金の一條でござりまするか。

織部。　そのことだ。なんとかして座頭どもを說き伏せねば相成らぬが、彼の撿校などが先立になつて兎角に理窟を申してなう。

半左。　御面倒お察し申しまする。

織部。　おゝ、察してくれ。（思案して。）これ、半左衞門。

半左。　はあ。

（織部正はさゝやく。半左衞門は色を變へておどろく。）

半左。　では、一服……。

織部。　むゝ、濃茶を一服だ。後刻わしが呼ぶほどに、薄茶と申したら別に仔細ない。濃茶と申したらば……一服だぞ。

半左。　はい。（當惑の體。）

織部。　當家にも出入りの醫者はあらう。即刻によび寄せて相談いたせ。

半左。　はあ。しかし即座に整ひますれば宜しうござりまするが……。

（半左衛門は氣の進まぬ體なるを、織部正は睨むがごとくに視る。）

織部。　半左衛門、不承知かな。

半左。　いえ、決して左樣なわけでは……。

織部。　では、賴んだぞ。

半左。　はあ。然らば暫時御免くださりませ。

（半左衛門は餘儀なく承諾して、思案ながらに立去る。源五郎はあたりを見まはして主の顏色をうかゞふ。）

源五郎。　殿樣。大橋撿校に一服まゐるのでござりまするか。

織部。　このたびの御用金について、故障を申立つる發頭人。生け置いては上のお爲になるまい。彼さへなくば、他の座頭どもは泣寢入りであらうよ。

源五郎。　しかし、半左衛門甚だ迷惑のやうに見受けましたれば、濃茶の役目果して首尾よく相勤めませうか。ちと心許ないやうにも存じますするが……。

織部。　一旦請合うたからは、彼も佐藤半左衛門、まさかに仕損ずることもあるまい。

源五郎。　いつそ彼の手を待たず、わたくしが……。（刀の柄をたゝく。）如何でござりませうな。

織部。　むゝ。（考へる。）先づ待て。かれを生かすも殺すもこつちの胸にある。何事も掛合の模樣次第で、臨機應變の處置を取らうよ。

源五郎。　はあ。

（上の方の木かげより大橋撿校、金襴の燕尾帽子、むらさきの衣、白の袴、庭下駄をはき、擂木杖を持ちて出づ。召仕の女一人、袴を持ちて附添ひ出づ。）

織部。　おゝ、撿校。よいところで逢うたの。

撿校。　先日は失禮つかまつりました。

（召仕は緣に袴をしき、撿校は織部正と相對して履をかける。召仕は會釋して去る。）

織部。　大分春めいて來たではないか。

撿校。　御意の通り、過日の大雪以來、俄に餘寒も薄らぎましたやうに存じまする。

織部。　殊にこゝらの海邊は長閑だなう。

（鶯の聲きこゆ。）

檢校。　おゝ、鶯が啼きまする。

織部。　檢校は歌の上手と聞いたが、どうだ、一首出來ぬか。

檢校。　どう仕つりまして……。わたくし共の腰折れは、とても御覽に入れられませぬ。お前樣こそ發句がお上手と承はりましたが……。

織部。　いや、とても、とても……。私等こそほんの素人だ。

（云ひつゝ源五郎に目くばせすれば、源五郎は心得て去る。うぐひすの聲つゞけて聞ゆ。）

織部。　さて檢校。あたりに人も無し、丁度よい折柄、ちと打寛いで相談したいことがある。と申したら、大かたは推量もならうが、例のお臺場の一件だて。近年諸國の黑船渡來して、世は次第にさわがしく、何時どのやうな軍が起るまいとも限らぬ。就てはこの江戸の警固のために、品川より羽田の沖へかけて、十一ヶ所の臺場を築き、萬一の用心に備ふることゝ相成つたが、扨その費用に當惑いたして居る。

檢校。　それはわたくしも薄々は承はつて居りまする。昨年の七月から當春へかけて、やうやく第三のお臺場まで出來。その費用はすでに十六萬兩に上つたとのことでござりました。

織部。　さあ、そこだ。第三の臺場までに最早十六萬兩を遣ひ捨てたとしたら、殘る八ヶ所を作り終るまでには、なほ四五十萬兩の金が要らう。勿論、急場の凌ぎとして、この佐藤に申付け一朱銀を吹かせたが、その位ではとても足らぬ。この上は諸大名に御用金だが、大名もこのごろは貧乏が多い上に、めい〳〵の領分の警固仰せ付けられてゐるので、それを云立てに兎やかくと故障を申し、先づこつちの見込みの半分もあつまるまい。その次は江戸の町人だが、これも毎々のことであるから、思ふやうには取立てられぬ。

檢校。　それも過日來たび〳〵のお諭しで、よく判つて居りまする。つまりは江戸中の檢校勾當座頭どもより、總高二萬五千兩を上約せよとの御趣意でござりませうが、その儀は何分にもお請がいたし兼ねるかと存じまする。

織部。　なぜ不承知と申すのか。

檢校。　なぜと申してかんがへても御覽じませ。滿足な人間とは違うて、いづれも不具の盲人が、血のなみだでたくはへた金でござりまする。盲が力とたのみまするは杖と金。その金をむさ〳〵と召上げられましては、命を取られましたも同樣。どうぞお察しくださりませ。

織部。　しかし先月の末、檢校の屋敷へ浪人どもが押入つた節に、命には替へられぬと申して三百

金遣はしたと云ふではないか。それほど大切の金ならば、命にかへても渡さぬ筈だが…。

檢校。 それはわたくし一人のことで、どのやうにも諦めもなりまするが、今度のは大勢の難儀になりますることで何うもお請はできませぬ。若しわたくし一人でよろしければ、有金は事すにおよばず、家財のこらず何時でも上納いたしまする。その代りに、他の者どもは格別の御慈悲を以て、御用金御免のほどを偏におねがひ申上げまする。

織部。 いや、それは成らぬよ。くどくも申す通り、上のお手許逼迫の折柄だ。無理かは知らぬが、お身達にも御用を勤めて貰はにやならぬぞ。

檢校。 勿論いよ〳〵と申す場合には、どのやうな御用をも勤めませうが、その御無理をうけたまはるにはまだ時節が早いかと存じまする。このたびの一朱銀吹替へに付きましても、定め以外のお吹増も多分にござりましたとやら……。その吹増だけでも、一萬兩や二萬兩はござりませうに……。

織部。 こりや、檢校。異なことを申すな。然らばこのたびの一朱銀について、上役人が多分の吹増を作り、わたくしに懐中を肥したとでも申すか。さりとは聞き捨てにならぬぞ。今一度しかと申せ。

（織部正の聲すこしく荒くなるほどに、上手の木かげよりお照うかゞひ出で、ふたりの問答に耳をかたむく。）

檢校。 いや、これは世間の取沙汰、もとより取止めたることではござりませぬ。併し假にも左様の噂が立ちましては、上の御威光にもかゝはりまする事と、蔭ながら心を痛めて居りまする。

織部。 取止めもない噂とあれば、深く詮議も致すまいが、お身達までがそのやうな事を申すは、時節柄おだやかでないぞ。

檢校。 恐れ入りましてござりまする。

（下手の木かげより源五郎忍び出で、いつぞ檢校を斬らうかと刀に手をかける。お照はあつと叫ばんとして息をのみ、手に汗を握りて窺ひゐる。うぐひすのこゑまた聞ゆ。）

織部。 おゝ、また鶯が啼くか。うぐひすも餘り近くへ來てはさう〳〵しい。やはり遠くで聽くに限るな。

（源五郎にむかひて、あちらへ行けと眼で知らすに、源五郎は餘儀なく去る。お照はほつとして、猶も忍びてうかゞひゐる。）

織部。（たち上る。）いや、先刻からの掛合ひで、喉が渇いてならぬ。こりや、誰か居らぬか。

（奥に向つて呼ぶに、お照はあわてゝ奥へ逃げ入る。召仕の女一人出づ。）

召仕。召しましたか。

織部。茶を一服所望だ。主人に申して濃茶をたのむぞ。

召仕。かしこまりました。

（召仕は去る。織部正は再び縁に腰をかける。）

織部。どうだ、撿校。分別は付いたか。お身は座頭なかまの幅利きで、惣祿をも凌ぐほどの威勢と聞く。そのお身さへ素直に承知すれば、他の者共にも故障はあるまい。この事の成るか成らぬかは、お身の料簡一つだぞ。

撿校。左様に仰せられまするが、なにぶんにも盲目不具の者共でござりますれば……。

織部。お身は二口目には盲目不具をいふが、その不具者が無事に妻子眷族をやしなひ、撿校の勾當のと申して安樂に今日を送るは、誰のおかげだ。皆これ上のお慈悲ではないか。

撿校。誰のお庇でもござりませぬ、めい〳〵の力でござりまする。勿論、上にもお慈悲がござりまして、座頭金の高利は天下御免と相成つては居りまするが、たゞ懐手をして居つては、撿校にも勾當にもなられませぬ。眼あきの人が半日働くところは一日働き、眼あきの人が一日働くところは夜晝働き、人一倍の艱難辛苦を積んで、やう〳〵今日の身の上と相成つたのでござりまする。はゞかりながらお前様方のやうに、千石のお家に生れた者には、生れながらに千石の祿があり、一萬石のお家に生れたものには、生れながらに一萬石の祿が附いてゐるとは、まことに雲泥の相違で、われ〳〵座頭の官祿は、自分の腕で取つたのでござりまする。

織部。もうよい、よい。理窟を申すな、お身が達て不承知とあれば是非もない。役人衆とも相談して、またあらためて沙汰を致さう。

撿校。何分よろしくお願ひ申しまする。

（半左衛門は茶碗をさゝげて出で、先づ織部正の前におく。）

織部。おゝ、濃茶か。

（意味ありげに半左衛門の顔をみる。半左衛門は怖ろしさうに首肯く。）

半左。甚だ粗茶でござりまする。

織部。先づ撿校へ……。

半左。はあ。

（半左衛門はすこしく顫へながら、撿校のまへに茶碗を置く。）

撿校。先づあなたから……。

織部。いや、先づ撿校から……。

撿校。では、お先へ頂戴いたしまする。

（撿校は茶碗を把りて、ちつと考へる。）

撿校。もし、これを飲んでも宜しうございまするか。

織部。おゝ。苦しうない。

撿校。これを飲んでも……宜しうございまするか。

（織部正は默つてゐる。）

撿校には何故そのやうなことをお訊ねなされまするな。

半左。（嗣しづかに。）今こなたが持つて來たこの濃茶……。飲んでよいか惡いか、訊ねるのぢや。

撿校。（半左衛門は色をうしなひて顫へる。織部正は顰がす、打笑む。）

織部。いや、流石は撿校……。覺られたら隱しても詮ない。お身に飲まさうとしたのは、毒であつたよ。

撿校。大方そんなことであらうと存じました。はゝゝゝゝ。

織部。はゝゝゝゝ。

撿校。兎かく此頃は、この手が流行りまするな。

織部。人は苦しくなると、いろ〳〵の小刀細工をするものだ。まあ、料簡してくれ。併し盲人といふものは、なか〳〵油斷がないなう。

撿校。まして相手はお前樣、なほ〳〵油斷はできませぬ。

織部。私はそれほどの惡人かな。

撿校。善人でもございますまい。

織部。これ、半左衛門。わしも今日はひどく器量を下げたよ。

（織部正は笑つてゐる。上手の木かげよりお照再びうかゞひ出づ。時の鐘きこゆ。）

織部。おゝ、思はずもこゝで時を移した。どれ、そろ〳〵立歸ると致さうか。

撿校。わたくしもお暇いたすでございませう。

織部。お身はまあゆつくりせい。わしが歸ればもう大丈夫だ。（又笑ふ。）

檢校。いえ、これから阿部様御陣屋へお見舞にまゐりまする。

織部。勢州の屋敷へも出入りをするか。

檢校。御息女に琴の指南をいたしまする。

織部。おゝ、左様であつたか。

（檢校も織部もたち上る。）

半左。織部正様お立ちでござりまするぞ。御家來衆、御家來衆。

（呼ばれて、下手より源五郎出づ。）

織部。では、檢校。

檢校。おわかれ申しまする。

（源五郎は再び刀に手をかけて寄らうとする。お照は走り寄つて父を庇ふ。織部正は頭をふりて止せといふに、源五郎は控へる。）

檢校。大分風が寒くなつてまゐりました。おゝ、娘か。

（檢校はお照の手を把りて徐かにゆく。風の音して、梅の花散る。）

――幕――

第三幕

（一）

高輪の山手、阿部伊勢守の陣屋。粗木普請の二重屋體にて、軒には阿部家の定紋（鷹の羽の打違へ）を染めたる幕を張り、家の左右には柵を結ひて、おなじく陣幕を張る。すべて戰陣の構へにおなじ。上のかたの庭さきには金の馬標（矢はり鷹の羽の定紋にて、馬簾は猩々緋なり。）を立てさせ、輕裝したる家來二人これを守護す。

（緣の上に阿部の家來四人、黑木綿の着附、みじかき袴、脚絆、大小にて控へゐる。前幕とおなじ日の午後。風の音すさまじく聞ゆ。）

家來甲。ひどい風になつて參つたやうだな。

家來乙。今までは、そよりともせぬ晴天であつたに……。

（みな〳〵不安らしく空を仰ぎみる。）

品川の臺場

家來丙。近來は兎角に斯樣な天氣があつてならぬ。

家來丁。沖に異變がなければよいがなう。

（阿部家の用人青木賴母、三十餘歳、陣羽織、野袴にて奥より出づ。）

賴　母。俄に風が吹き出したやうだが、困つたものだ。（縁先に出て空を仰ぐ。）毎年冬より春にかけて、品川沖には不時の颶風がおこり、漁船等をくつがへす例は屢々あると聞いたが、殊に今は二月、よほど用心せねばなるまい。

（家來一人出づ。）

家　來。御用人に申上げます。大橋撿校殿、御陣屋お見舞として參られました。

賴　母。なに、大橋撿校が參つたと……。殿樣御留守ではあるが、兎もかくもこれへ通せ。

家　來。はあ。

（家來去る。遠雷の聲きこゆ。）

賴　母。雷が鳴るな。

家來甲。今頃の雷鳴は珍しいことでござりまする。

賴　母。むゝ。陸の方は差したることもないが、海の空はいよ〳〵暗くなつてまゐつた。あれ、あれ、墨を流したやうな黒雲が、次第に舞ひ下つてくるわ。

家來乙。いよ〳〵心許ない空模樣になつてまゐつた。

（皆々向ふの空をながめて不安の體なり。下のかたより紺法被の陸尺は大橋撿校の乘物を昇き入る。）

賴　母。娘お照もあとより附添ひて出づ。）

お　照。おゝ。娘御も御同道か。苦しうござらぬ。これへ、これへ。

撿　校。御免くださりませ。

（撿校はお照に扶けられて、乘物を出づ。）

陸　尺。（陸尺どもに向ひて。）お前たちは暫らくあちらに控へて居れ。

（陸尺どもは乘物を昇きて去る。撿校はお照に手をひかれて、縁にあがる。）

賴　母。撿校、ようこそ見えられた。何分にもこの通りの陣屋であれば、失禮はお免しくだされい。

撿　校。方々にも日々の御出役、御苦勞に存じまする。今日は高輪の佐藤半左衛門屋敷まで出向きましたれば、序ながら御見舞にうかゞひました。

賴　母。それは忝けない。殿は作事御檢分のために、唯今海手の方へ御出向きに相成つたが、やが

て御歸陣遊ばすであらう。先づゆる〳〵と休息せられい。

檢校。　ありがたうございまする。

（風の音いよ〳〵急なるに、檢校は耳をかたむく。）

檢校。　すさまじい風でございまするな。

お照。　海の方は眞闇になつてまゐりました。

賴母。　龍卷でも起りさうな景色……。沖には大勢の人が出て居る。あやまちの無いうちに一旦引揚げさせようかな。

檢校。　いかにもそれが宜しうございませう。

賴母。　むゝ。貝を吹け。

家來甲。　はあ。

（家來は柱にかけたる法螺を取り、緣先に出でて吹き立つる。下のかたより金杉の清吉出づ。）

清吉。　お作事は見あはせでございますか。

賴母。　何分にも空模樣が心もとない。萬一の用心のために、沖へ出てゐる者はすべて引揚げさせい。

清吉。　仰しやる通り、品川沖にはとき〳〵颶風が起るので、なか〳〵油斷はできません。だが、青木樣、御心配なさいますな。唯今沖へ出てゐるのはほんの僅かばかりで、あとは大抵引揚げてをります。

賴母。　指圖も無いになぜ引揚げた。

清吉。　なぜと云つてお察し下さいまし。大勢の人足どもが命がけでお臺場の仕事に來るのも、みんな一朱といふ銀が欲いからでございます。それを昨日から一文も渡らないので、奴等はみんな中つ腹で、けふは碌々に仕事もせず、好加減に陸へ引きあげて來て、さつきからぶら〳〵遊んで居りますよ。

賴母。　それは困つたなう。どうで人足共などは、物の道理のわからぬ奴等ばかりであるから、それを取締まるために、組頭も小頭もあるではないか。第一に其方どもが默つて觀てゐる法はあるまい。怠ける奴は嚴重に戒めて、御用を勵むやうにせねば成らぬぞ。

清吉。　なるほど、理窟を云へばそんなものですが、金がほしさに働いてゐる奴等に、金をやらえで働けとは、わたくしの口からも云ひにくうございますからね。已にきのふもわい〳〵騷ぐ奴を、とうにか斯うにか宥めて歸したんです。ところで、けふもまだ不渡りぢやあ、

頼母。何ぼわたくしでも既う口が利かれませんから、たゞ成行に任せてあるんです。

清吉。馬鹿を申せ。大急ぎの御用仕事を、成行まかせに捨ておかれて堪らうか。

それぢやあ人足どもの手間賃を、きのふと今日の分をあはせて、ひとり頭に二朱づつ綺麗に拂つて下さいますか。

頼母。勿論拂はぬとは申さぬが、先月中銀座で吹きあげた一朱銀は、殘らず出拂ひと相成つて、すぐに吹増しの最中であれば、今一兩日待てと申し聞かせたを、其方どもは何と聞いた。

まあ、我慢して待つてくれ。

清吉。わたくし共はどうにも我慢できまずが、その日暮しの人間にやあ、その我慢ができませんから、そこを何うかお察し下すつて、けふは兎もあれ、せめて昨日の分だけでも……。

頼母。えゝ、わからぬ奴。銀がないから拂へぬと申すに……。

清吉。貧乏人の大晦日ぢやあるめえし、公方様のお仕事に、銀がねえから拂へねえと、澄してゐられちやあ困りますね。（冷ら笑ふ。）

頼母。（むつとする。）むゝ、よし。もう此上は貴様はたのまぬ。拙者直々にゆき向つて一同に理解を加へると致さう。（たち上る。）

撿校。いや、しばらく……。かれらの仲間にはまた彼等の作法がござれば、お身が直々に懸合はれては、却つて事をやぶる基かと存じまする。やはり清吉に任して置かれたが宜しうござらう。（清吉にむかひ。）これ、清吉。おまへも間に立つて困るであらうが、これも餘儀ない場合ぢや。手下の者共はなんとか宥めておけ。

清吉。でも、これが五人や三人なら兎もあれ。なにぶん大勢のことですから……。

撿校。それも長くは待たせぬ。早ければ今夕刻おそくも明朝までには、銀座の銀がとゞいてくる。

清吉。ほんたうでございますか。

撿校。なんで嘘を云はうぞ。わしは今、佐藤の主人から確かに聞いて來た。多分夕刻までにはまゐるであらう。

頼母。兎かう申すうちに、もう夕刻だが、それでも其方は待てぬと云ふか。

清吉。いえ、何、これが一晌か半晌のことなら、そりやあ何とでも云つて押さへて置きます。どうでこの天氣ぢやあ沖へも出られますまいから、めい〳〵の小屋に遊ばして置きませうよ。

頼母。兎も角もよいやうに頼むぞ。

清吉。かしこまりました。

品川の臺場

（雨の音遠くきこゆ。）

清吉。　不思議なことがあるもんだ。こつちは一粒も降らねえのに、沖の方はまるで夕立のやうですぜ。なにしろ、これから早く行つて、沖へ出てゐる奴を呼び上げませう。どなたも御免下さいまし。

（清吉は挨拶して下のかたに走り去る。頼母はあとを見送りて嘆息す。）

頼母。　検校。聞かるゝ通りの始末。お察しくだされい。

検校。　困つたことでござりまするな。先刻も安藤織部殿から色々と承はりましたが、上にもよく〳〵御逼迫の趣、このまゝで打ちつゞきましたら、行末はどうなりませうか。

頼母。　行末は知らず、差當つてはこのお臺場の御普請を、とゞこほりなく仕上げねば、總監督たる御主君のお役目が相濟まぬ。と申して、無い袖は振れぬの譬で、我々もほと〳〵當惑いたしてをる。

（家來一人出づ）

家來。　佐藤の番頭がまゐりました。

頼母。　おゝ、銀を屆けにまゐつたのか。

家來。　叺に入れて澤山持參いたしました。

頼母。　おゝ、左樣か。（よろこんで起ち上る。）番頭を早くこれへ呼べ、呼べ。

家來。　はあ。（引返して去る。）

頼母。　（ほつとして。）まあ、よい。これで先づ安堵いたした。

家來甲。　なるほど、検校が云はれた通り、夕刻までに銀がとゞいて、御同樣に安心でござる。

家來乙。　左もないと彼等のことゆゑ、明日より仕事をせぬなどと申して、われ〳〵を困らせたかも知れませぬ。

（佐藤の番頭傳藏出づ。）

頼母。　おゝ、傳藏。大儀であつた。して、銀は何ほど持參いたした。

傳藏。　とりあへず五百兩だけ持參いたしました。

頼母。　叺に入れてあるならば、その入口へ積んでおけ。

傳藏。　承知いたしました。（検校を見て。）おゝ、検校樣。お嬢樣も御一緒でござりましたか。

お照。　父と一緒に先刻まで、高輪の御別莊で御厄介になつて居りました。

傳藏。　左樣でござりましたか。わたくしどもは先月末から銀座の方に詰め切りで、眼のまはるや

うな忙しさに、主人別荘の方へも一向にまゐりません。

檢校。こなた衆は幾ら忙しうても、吹増しで多分の儲けがあらう。まあ、精出して悪い銀を澤山に作るがよい。（冷笑ふ。）

傳藏。（頭をかく。）それは先日も伺ひましたが、まことにどうも致方のない儀でございます。

檢校。先刻からこれに控へて聞いてをれば、人足どもの支拂まへも行きとゞかず、銀が屆くを待ち兼ねて、わづかに其日その日の勘定を濟ましてゐる樣子ぢやが、公方樣のお膝下で日本一の大工事をするに、その日暮しのありさまでは、無理に作り上げたところで、このお臺場がお役に立たうか。心もとない次第ぢやなう。

賴母。お詞ではあるが、今更半途でお見あはせも相成るまい。はじめに定められたる十一ケ所のお臺場は、無理にも作り上げてしまはねば、上の御威光にもかゝはるでござらう。

檢校。貧乏人が土藏を建てゝ何うなさる。土藏の出來あがる頃には、家が潰れてしまひませうぞ。

賴母。いや、兎角に皮肉を申さるゝが、爲るだけのことをして、扨その上は運次第と、われ〳〵はかねて覺悟いたして居る。

檢校。運次第とは心ぼそい仰せぢや。人間の智慧を以て、かたむく運を盛返すが、先見の明と申すものではござらぬか。わたくしどもの所存を憚りなく申せば、今となつてお臺場を築かるゝなどは既う遲い。兎もかくも諸外國の望みにまかせて、一先づ交易をお許しあるが、無事太平の道かと存じまする。さらでも上下ともに逼迫の折柄、無用の金銀を費して、かやうな御普請などいつまでもお續けなさるは、却つて世の亂れをまねく基でござりませうに……。

賴母。なるほど、それも一理あるかも知れぬが、上役人衆が評議に評議をかさねし末に、いよいよ斯うと定まりしことを、お身たちが今更兎かう申されたとて效もあるまいよ。

檢校。さればこそ今日まで差控へて居りますのぢや。上役人衆も大勢ござるに、そこに心の付く人のないと申すは……。

（お照は心配して父の袖をひく。）

檢校。なに、賴母どのは年來の御懇意ぢや。なにを申したとて遠慮はないわ。

賴母。いかにも拙者の前では御遠慮には及ばぬが、自然餘人の耳に入つて、天下の政道に喙を容るゝなどと云ひ觸らされたら、お身のためにも宜しくあるまい。先づ慎まれたがようござるぞ。

檢校。　仰せまでもございませぬ。すでに先刻も佐藤の別荘で……。

傳藏。　え、どうかなされましたか。

（お照は氣を揉みて、しきりに父の袖をひく。檢校は打笑む。）

檢校。　いや、何、濃茶の御馳走になりましての。

傳藏。　へえ。

檢校。　唯それだけのことぢや。はゝゝゝゝ。

（傳藏は合點ゆかぬ體なり。金杉の清吉再び出づ。）

清吉。　（威勢よく。）御用人樣。お銀が居いたさうでございますね。

頼母。　おゝ、たゞいま其方を呼ばうと存じてゐたところだ。

傳藏。　すぐに嗅付けて來なすつたね。

清吉。　こつちは鵜の目鷹の目で見張つてゐるんだ。だが、まあ、これでわたくしも安心しました

よ。

頼母。　沖には差したる暴れもなかつたか。

清吉。　何しろだしぬけに颶風が吹いて來たので、土を積んでゐる船が一艘……。たうとう遣られ

てしまひました。

傳藏。　やれ、やれ、また引つくりかへつたのか。

頼母。　して、乘つてゐる者はどうした。

清吉。　その船に乘つてゐた人足は丁度八人。みんな流されてしまつたので、今その死骸をさがし

て居ります。

頼母。　不憫なことを致したなう。

傳藏。　どうすれば毎日人死が出來るか。して、それは親分の手下かえ。

清吉。　（嘆息する。）みんな私の入れた人足ぢ。しかもその中で七之助といふのは、今日はじめて仕

事に來たばかりで、すぐに流されてしまふとは、よく〳〵運が惡いんでせうよ。もし、檢

校樣。その七之助といふのは、毎日あなたのところへお稽古に出る、お雪といふ娘の弟

でございますよ。

（お照はおどろきて緣端へ進み出づ。）

お照。　え、あのお雪の弟が……。あの、七之助が……。

清吉。　わたくしが一度意見したのに、けふも又こゝへ遣つて來て、無理に使つてくれと云ひます

から、ぢやあ兎もかくも遣つて見るがいゝと、半日ばかり働かせるとすぐにこの始末、實に可哀さうなことをしましたよ。

檢校。　孝行剝身屋と評判の七之助が死んだか。

清吉。　まだ死骸は揚りませんが、まあ死んだらうと思ひますよ。

お照。　今朝お雪の病氣見舞に行つたときに、品川まで用達しに行くと云つて、わたしと一緒に路地を出たのが、思へばこの世の別れであつたか。お臺場の仕事に行くと知つたら、わたしが無理にも止めたものを……。情ないことになりました。（泣く。）

清吉。　あなた方は初めてお聞きなさるから、そんなに吃驚なさいますが、わたくし共は毎日毎日のことだから、此頃ぢやあそれほどにも思ひませんよ。ほんたうにこのお臺場ぢやあ何人死ぬか判りませんねえ。

お照。　でも、すぐに引揚げて手當をしたら、助からぬとも限りますまい。

清吉。　それもすぐなら兎も角も、時が經つちやあ迎も無駄です。

お照。　それではせめて死骸でも……。（起ちあがる。）

清吉。　いや、その死骸もまだ揚らねえんですよ。

お照。　けふに限つて海が暴れるとは……。

檢校。　彼もよく〳〵の不運とみえた。死んだ者はそれまでぢやが、あとに殘つた姉の悲みが思ひ遣らるゝなう。

清吉。　とりあへず知らせて遣りましたから、今に駈け付けて來ませうが、また泣かれちやあ困るなあ。（又嘆息する。）

賴母。　親類どもが死骸を受取りにまゐつたら、これも上への御奉公だと、よく云ひ聞かして勞つてやれ。

清吉。　かしこまりました。

（清吉の子分勘太走り出づ。）

勘太。　おい、親分、早く來てくんねえ。大變な騒ぎが始まつたよ。

清吉。　どうした、どうした。

勘太。　なにしろ、きのふも今日も〇が渡らねえんで、人足どもは合點しねえ。

清吉。　だから、もう少し待てと云つてあるぢやあねえか。

勘太。　ところが、もう日が暮れると云ふのに、なんにも沙汰がねえもんだから、奴等は何と云つ

傳藏。　ても肯きやあしねえ。大勢で御陣屋へあばれ込むと騒いでゐるぜ。

傳藏。　なに、御陣屋へ暴れ込むと……。こりやあ飛んだことになつた。

賴母。　さりとは不屆至極の奴原、一歩たりとも御門内へ踏み込まば、片端から斬捨てゝも苦しうござらぬ。おの〳〵御油斷あるな。

家來一同。　心得ました。

賴母。　お馬標に疵でも付かば、お家の恥辱ぢや。屹と守護いたせ。

家來。　はあ。

賴母。　いざ、まゐられい。

（賴母尊は押取刀にて起ちあがる。）

清吉。　まあ、まあ、お待ち下さいまし。あなた方がお出向きになつては、事がいよ〳〵大きくなります。なにしろ、銀がもう屆いてゐるんですから別にむづかしいことはございません。わたくしに任してお置き下さいまし。すぐに取鎭めてまゐります。（勘太を顧かへり。）さあ、手前も來い。

勘太。　あい、あい。

傳藏。　あ、もし、どこへお出でなさいます。

お照。　七之助の死骸ももう揚つた時分……。せめて死顏を一度でも……。

傳藏。　では、わたくしが海岸まで御案内いたしませう。

檢校。　それほど見たくば行くもよからう。傳藏どの、賴みますぞ。

傳藏。　はい、はい。さあ、お出でなさいまし。

（お照と傳藏は去り去る。賴母は人足どもの模樣を氣づかひ、緣に立ちて向ふを望む。檢校は默して嘆息す。）

（清吉と勘太は走り去る。そのあとを見送りゐたるお照は、つゞいて緣より降り立ちて、これも走りゆかんとす。）

（二）

品川の海濱くみゆ。

（おなじ日の夕刻。臺場の人足大勢わや〳〵と罵りさわぐなか、芝井町の源藏、鮫月町の藤次が制し

高輪の海岸。上のかたには竹矢來を結ひたる作事場あり。正面より下の方へかけて、臺場を築ける

てゐる。）

源　藏。　まあ、待て、待て。靜に云つても判ることだ。

藤　次。　萬事は親分が呑み込んでゐるから、決して惡いやうにやあしねえ。

源　藏。　なにしろ、もう少し待つが可い。

人足一。　小頭の前だが、けふ一日なら兎も角も、きのふも今日も渡るものが渡らねえぢやあ我慢ができねえ。

人足二。　斯う見えたつて、家にやあ泣くと喰はうの餓鬼もあれば、鳴もあるんだ。毎日毎日手ぶらぢやあ歸られねえ。

人足三。　命がけの仕事をして、たゞ追拂はれて堪るものか。

人足一同。　御陣屋へ行け、御陣屋へ行け。

源　藏。　御陣屋へ行つても、こゝでも同じことだ。

藤　次。　親分が今來るから待てといふのに……。

人足一。　いつまでも待つてゐられるものか。御陣屋へ押掛けて、役人に直に掛合ふんだ。

人足二。　邪魔をしねえで通してくんねえ。

源　藏。　そんなことをしちやあ、お前たちの爲にならねえ。

藤　次。　まあ、穩便にしてゐるが可い。

人足一同。　忌だ、忌だ。

源　藏。　忌だと云つても、通すことはならねえ。

人足一同。　かまふものか、押して行け。

（人足どもは無理に押通らんとするを、源藏と藤次は努めて制するところへ、子分長八走り出づ。）

長　八。　まあ、待ちねえ。親分が今こゝへ銀を持つて來るよ。

源　藏。　それ、みろ。親分が銀を持つて來ると云ふぢやあねえか。

人足一同。　ほんたうか、ほんたうか。

藤　次。　だから、まあ、騷ぐな、騷ぐな。

（上のかたより清吉と勘太は、他の子分に叺をかつがせて出づ。）

清　吉。　さあ、もうぐづ〳〵云ふことはねえ。銀座から銀が屆いた。みんな耳を揃へて渡すぞ。

人足一同。　ありがてえ、ありがてえ、

清　吉。　さあ、みんな來い、來い。

人足一同。行かう、行かう。

（清吉を先に源藏、藤次、勘太、長八、つゞいて人足共もわや〳〵云ひながら、作事場の矢來のなかに入る。上のかたより青木頼母は陣笠を被り、家來甲乙二人を從へて出づ。）

頼　母。人足共も幸ひに鎭まつたやうだな。

家來甲。銀さへわたせば彼等にも異存はござるまい。

家來乙。一旦は騒ぎ立つても、すぐに鎭まりまする。

頼　母。このやうな騒ぎが度々あつては困るなう。

（向ふより阿部伊勢守正弘、十萬石の大名にて、臺場建築の總督、三十四歳、陣笠、陣羽織、野袴にて馬にまたがり、家來數人と馬丁を率ゐて出づ。）

頼　母。殿樣、お歸りでござりましたか。

伊勢守。人足どもが騒ぎ立つたとかいふが、如何いたしたのぢや。

頼　母。手間賃の儀に就きまして、兎やかうとやかましく申し立てましたが、唯今銀座より金子到着、とゞこほりなく拂ひ渡しましたれば、もはや仔細もござりませぬ。

伊勢守。今更のことではないが、これほどの大仕事を控へながら、その日暮しは難儀だなう。

頼　母。檢校も左樣に申して居りました。（苦笑ひする。）

伊勢守。むゝ、檢校がまゐつたか。

頼　母。御陣屋御見舞として先刻みえました。

伊勢守。左樣であつたか。相變らず何か皮肉を申して居つたらうな。

頼　母。貧乏人が土藏を建てゝ何うするなどと申して居りました。

伊勢守。なるほど、檢校の云ひさうなことぢや。しかし今日の場合では、ない金を工面しても、爲るだけの事をせねばならぬ。なんでも遺れるだけのことを、精一ぱい遺つて見るよりほかはあるまい。

頼　母。ねばならぬ。なんでも遺れるだけのことを、精一ぱい遺つて見るよりほかはあるまい。

伊勢守。御意の通りでござりまする。

頼　母。それがために、徳川幕府の身代が潰るればそれまでぢや。おなじ賣据ゑの札を貼るなら、土藏附の方が世間體がよからうではないか。はゝゝゝゝ。（悲痛の笑顔）一同まゐれ。

頼　母。はあ。

（頼母をはじめ家來等一同は、伊勢守にしたがひて上のかたに入る。矢來の内より以前の人足ども大勢出づ。あとより源藏と藤次も出づ。）

品川の臺場

人足一。　小頭、どうも御心配をかけて濟みませんでした。
人足一同。　ありがたうございます。
源藏。　貰ふものをちやんと貰つたら、あしたも早く來ねえちやあいけねえぜ。
藤次。　刻限までに來ねえと、入れねえよ。
人足一同。　へえ、へえ、承知しました。
（人足どもは上下にわかれて去る。）
源藏。　やう〳〵これで靜になつた。
藤次。　毎日これぢやあ遣り切れねえぜ。
（向ふより矢場の女房おたきは、お雪の手をひきて走り出づ。）
お雪。　一生懸命に駈けようと思つても、なにしろ足が不自由なもんですから……。
おたき。　あんまり急いで轉ぶといけないよ。あたしにしつかりと捉まつておいでよ。
お雪。　はい、はい。
（お雪は心急く體にてつまづき倒るゝを、おたきは介抱す。）
おたき。　だから、云はないことぢやあない。この上にお前が怪我でもしちやあ仕樣がないよ。

源藏。　おゝ、梅本のおかみさんぢやあねえか。
藤次。　姉さんも一緒に來たのか。
お雪。　七之助はどう致したのでございます。
（源藏等は顏をみあはせて返事に困る。）
源藏。　え、七之助はどうも其。つまらねえことで……。
おたき。　海へ落ちたと云ふのはほんたうですかえ。
藤次。　まあ、まあ、そんなやうな譯なんだが……。
お雪。　して、無事に助かりましたか。
源藏。　助かつたくらゐなら、わざ〳〵知らせて遣りやあしねえ。姉さんの前ぢやあ云ひにくいが、まあ諦めるより外はあるめえよ。
お雪。　では、弟は……。もし、おかみさん、どうしたら好うございませうねえ。
（お雪は身も世もあられぬやうに、おたきに縋りて泣き入る。）
おたき。　ほんたうに飛んでもないことになつたねえ。けふ來るが早いか、すぐにこんな事になると
は、まるで夢のやうな話だねえ。

（お雪は正體もなく泣き伏す。源藏も藤次も顔をみあはせて嘆息す。矢來のうちより清吉出づ。）

清吉。　おゝ、おかみさんも姉さんも來なすつたか、あらましはもう聞いたらうが、これもまあ災難とあきらめて貰ひてえ。ほんたうに可哀相なことをしたよ。

おたき。　ぢやあ、もう手當も屆かないんですかえ。

清吉。　死骸は今やう〳〵引揚げたが、とても手當はとゞかねえのさ。だが、お上の御用で死んだのだから、こつちでも決して疎略にはしねえ。子分の奴等に吩付けて、家まで送らして遣らうよ。

おたき。　どうぞ宜しくお頼み申します。かうと知つたら勸めるんぢやあ無かつたに……。

清吉。　それを今更云ふのは愚癡だ。おい、ねえさん。

（お雪は答へずに泣き伏してゐる。清吉は近寄りて肩に手をかける。）

おい、おい、姉さん。たつた一人の弟を殺して、悲しいのは道理だが、お前の弟ばかりぢやねえ。毎日毎日大勢死ぬんだ。これもお上へ御奉公だと思つて、あきらめるが可いや。死骸を引取つたあとの始末も、俺がみんな呑込んでゐるから、決して心配しなさんな。立派に送葬も出してやるから……。

おたき。　も、、お雪さん。お前、さう泣いてばかりゐても仕樣がない。親分も深切にあゝ云つて下さるんだから、何事も約束だとあきらめて、兎もかくも死骸を引取つてお歸りよ。ね、判つたかい。そんなに泣いてばかりゐちやあ困るぢやないか。

（慰めながら引き起さんとすれば、お雪は矢庭にその手を提へる。）

お雪。　もし、おかみさん。弟は生きてゐるんでせうね。

おたき。　え。

お雪。　一緒に歸りますから、早く逢はしてください。

（みな〳〵顔を見合はせる。）

源藏。　なんだか樣子が可怪いぜ。

藤次。　急に取逆上せたんぢやあねえかね。

おたき。　ほんたうに困つてしまふね。お雪さん、しつかりおしよ。

お雪。　（衝と起ちあがる。）さあ、早く逢はしてください。なぜ弟を隱すんです。さあ、七之助。わたしが迎ひに來たんだから、早くおいでよ。

（云ひつゝ矢來の内に入らんとするを、清吉は遮る。）

清吉。七之助の死骸はそつちにありやあしねえ。まあ、逆上せちやあいけねえよ。

お雪。いゝえ、そこに隠してあるんです。早く呼んでください。連れて來て下さい。（清吉の胸倉を捉る。）

清吉。どうも困つたな。七之助に逢ひたけりやあ逢はして遣るから、まあ、まあ、氣を鎮めておれの云ふことを肯きねえ。

（振拂ふはずみに、お雪は倒れしが又起きあがる。）

お雪。あれ、あれ、あすこに七之助が……。あれ、あれ、笑つてゐる。

おたき。まあ、お待ちと云ふのに……。

（おたきは引止めんとするを、お雪は突きのけて矢來の内へ走り入る。）

清吉。また間違でもあつちやあいけねえ。早く行つて捉まへろ。

源藏。あい、あい。

おたき。仕様がないねえ。

（源藏藤次もおたきも續いて矢來のうちへ走り入る。）

清吉。天にも地にも掛替へのねえ姉弟が、不意にこんなことになつたと聞いちやあ、取逆上せるのも無理はねえ。弟は死ぬ、姉は氣ちがひになる。實に情ねえことだなあ。

（お照と傳藏は下のかたより出づ。）

傳藏。親分、今お嬢さんのお供をして、あすこの海端まで行つてみたら、丁度死骸が揚つたところで……。いや、もう、眼も當てられない始末でしたよ。（お照を見かへる。）もしお嬢様。いくら可哀さうだと仰しやつても、もう仕方がございません。あんまりお泣きなさらないがようございます。

（お照は默して涙をぬぐふ。）

清吉。いや、もう、泣くのは禁物ですよ。今もこゝに一人、氣の可怪い人間が出來て、持餘してゐるところさ。

お照。氣の可怪い人といふのは……。

清吉。え、あの七之助の姉が來まして……。さん〳〵泣いた擧句に、なんだか樣子が變になりました。

傳藏。ちやあ、姉さんも氣が狂つたのか。

お照。泣いて氣の狂ふ人は羨ましい。

傳藏。　え。

お照。　いつそ氣が狂つたら悲みも嘆きもあるまい。なまじひ正氣でゐればこそ、泣いても泣いても涙は盡きぬ。わたしもお雪のやうになりたい。（泣く。）

傳藏。　（呆れる。）もし、飛んでもないことを仰しやいますな。さあ、さあ、早くまゐりませう。

お照。　でも、わたしはもう一度……。

傳藏。　（下の方へ引返さんとするを、傳藏はあわてゝ遮る。）いえ、いえ、こんな所にいつまでもうろ〳〵してゐると、どんな魔が魅すかも知れません。もうお歸りなさいまし。（窺めながら上のかたを見る。）おゝ、あれ、あれ、向ふからお父様のお乘物がみえます。丁度幸ひ、こゝでお待ち受けを致しませう。

清吉。　おゝ、なるほど。お乘物がこつちへ來るやうだ。

（上のかたより陸尺二人は大橋撿校、乘物を舁き出づ。）

傳藏。　お師匠様、今お歸りでございましたか。

（撿校は乘物の戸を開く。）

撿校。　おゝ、傳藏どのか。娘は如何いたしました。

お照。　お父様、わたくしはこゝに居りまする。

撿校。　七之助の死骸を見たか。

お照。　はい。（涙をぬぐふ。）お雪も氣が狂つたさうでございます。

撿校。　姉弟揃うて因果なことちや。（悼ましげに嘆息して。）こゝは何處らぢや。まだ高輪の海岸かの。

お照。　はい。高輪でございまする。

撿校。　雨は止んだやうぢやな。

傳藏。　へい。雨はひとしきりで、海の方もすつかり晴れました。

撿校。　おゝ。しばらく乘物をおろせ。

陸尺。　へい、へい。

（陸尺は乘物をおろす。撿校は傳藏に扶けられて、乘物を出づ。浪の音きこゆ。撿校は耳をかたむける。）

撿校。　浪の音が高い。海はあちらでござるな。

傳藏。　左様でございます。

撿校。　娘……むすめ……。まだ泣いてゐるのか。

お照。　はい、はい。なんぞ御用でゞさりますか。

檢校。　品川の海は廣いであらうな。

お照。　安房上總まで一目にみえまする。

檢校。　お臺場は第一、第二、第三まで出來したか。

傳藏。　へい。唯今第四番目の普請に取りかゝつて居りますが、これからだん〳〵に順を逐つて、十一ケ所造り上げるのは、容易なことではゞさいますまい。

檢校。　先づ半分ぐらゐで沙汰止みであらうよ。わしは眼が見えぬから、お臺場とは何のやうなものか知らぬが、江戸の海は東に安房上總をひかへ、みなみは武藏相模に連り、たゞ一方の口を開く。もし萬一のことある時、こゝの臺場がお役に立つやうでは、大江戸四里四方は灰とならう。何十萬の金を費し、何百人の命をすてゝ、無理に造るは無益なことぢや。

お照。　でも、あのやうに立派に出來て居りまする。

檢校。　出來たものは取毀すには及ばぬ。たとひ時代は變つても、海はいつまでも同じ海ぢや。むかしの人が作るゝまで働いた形見として、百年の後まで殘すがよからう。

（檢校は見えぬながらに海を望む。夕日のなごりにて、海の空に一道の虹美しくあらはる。）

お照。　あれ、あれ、綺麗な虹が……。海の方に……。

傳藏。　おゝ、東の空に虹が出ました。

檢校。　虹が出たか。西に沈む日をうけて、東にあらはれた虹の影……。美しう輝くも束の間で、やがて消ゆるわ、日も暮るゝわ。

（檢校は一種の悲哀を感じて、慢然として立つ。矢來の中よりお雪は髮をふりみだして走り出づ。清吉とおたきは後より追つて出づ。）

清吉。　おい、おい。どこへ行くんだ。まあ、待ちねえ。

たおき。　ほんたうに困る人だね。

（お雪は檢校をみて走り寄る。）

お雪。　弟を返してくださいよう。

（お雪は張裂くばかりに叫ぶ。お照は取りつきて泣く。檢校は杖に縋りて立ちたるまゝ、詞もなし。虹のかげは漸く消えて、涙の音さびしく、入相の鐘きこゆ。）

——幕——

淺茅が宿

大正二年一月作。
大正五年十月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――勝四郎（澤村宗十郎）宮木（村田嘉久子）萩野七郎（市川小團次）小雪（宇治龍子）歌占の女（東日出子）など。

初演當時の名題は『增補雨月物語』

この戯曲二幕は上田秋成の『雨月物語』の中にある『淺茅が宿』の一編から材を取つたもので、上の卷はまつたく私の創意である。下の卷も舞臺上の都合で、改作した點も尠くない。

登場人物――絹商人勝四郎。その妻宮木。大内の公達龍王丸。大内の家臣萩野七郎、山口平馬。小姓犬稚。大内の侍女小雪。荷持の男重助。眞間の里人佐市。そのむすめお秋。歌占の女。赤間の遊女入江、浪路、刈藻、磯萩、白縫、八島。禿千鳥。茶店のむすめ。旅の女房、娘など。

上の卷

足利時代の末、三月廿四日。

淺茅が宿

長門國、赤間關の海濱。正面より上のかたには阿彌陀寺の丘陵を望み、中央より下のかたは海をへだてゝ大里の濱をみる。おなじく下の方に葭簀張の茶店ありて、よきところに床几二脚を置く。所所に櫻の立木あり。

（旅の女房と娘いづれも旅裝束にて床几に腰をかけ、茶店のむすめは茶を汲んで出づ。）

茶屋娘。　お茶一つ召上りませ。

女房。　よい鹽梅にお天氣がつゞきます。

茶屋娘。　とかく此頃は雨や風の多い時節でございます。

旅の娘。　こゝらは大層賑かいやうでございますが、何ぞお祭りでもあるのでございますか。

茶屋娘。　お前様がたは旅のお方で、御存じないは御もつともでございますが、けふは三月の廿四日で、先帝祭の御當日でございます。

女房。　なるほど今日は三月の廿四日、噂に聞いた赤間ヶ關の先帝祭でございますか。道理で町中が大層賑かなことぢやと思うてゐました。

茶屋娘。　もう一足早くお出でなされたら、太夫さん達の行列が觀られましたものを、惜いことをなされました。ことしも例年の通り、太夫さん達は五つ衣に緋の袴といふ官女の扮裝で、それはそれは見事なことでございました。それは殘念なことをしましたなう。

旅の娘。　（二人は茶をのんでゐる。下のかたより下總の糊商人勝四郎、三十二三歳、しばらく此地に逗留してゐたる體にて、旅中ながらも打寛ぎたるこしらへにて出づ。）

茶屋娘。　お休みなされませ。

勝四郎。　いつも〳〵店は繁昌だな。

（勝四郎も床几に腰をかける。）

勝四郎。　この土地の名物といふ先帝祭も、朝からよい天氣で仕合であつた。（女房等に。）お前様がたも行列を御覽なされましたか。

女房。　今もその噂をしてゐた所でございましたが、一足違ひで見はぐりました。

勝四郎。　參詣は疾うに濟みましたが、下向にはまだ間もございませうから、今にこゝらを通るかも知れませぬ。尤も參詣のときとは違うて、下向の路は思ひ〳〵に、五人三人連立つてゆくとか聞きましたれば、本式の行列は見られますまい。

旅の娘。　一體、その先帝祭とかいふのは、どういふお祭りでございます。

勝四郎。　わたくしも旅の者で、委しいことは知りませぬが、今からなんでも三百年ほど昔に、平家の一門がこの壇の浦でほろびたので、その日を御忌日に年々お祭りを催すのだとか聞きました。又その日にかぎつて遊女達が五つ衣や緋の袴で、お寺へ參詣に出まするのは、むかしの官女の名殘だとか云ひまする。いや、それに就いて可笑いお話がございます。わたくしが昨年の十月に、初めてこの土地へ參りまして、某揚屋へ遊びに行つたと思召せ。太夫めが横風にずつと座敷へ通つて來て、なんの會釋も無しに、わたくしの上座にしやんと居直りました。はて、不思議なこともあるもの。客に買はれた太夫の身が、客よりも上座に直るとは一向理窟に合はぬことだと、わたくしも一旦はむつとしましたが、あとでよくよく聞いてみますれば、これも矢はり昔の平家のなごりで、遊女は飽までも官女の格式を守つて、われ〳〵のやうな普通の客は、眼下に見てゐるのださうでございます。所かはれば品變るとやらで、その土地に因つてまた變つた風俗もあるものでございますな。はゝゝゝはゝ。

（勝四郎は口輕に物語れば、みな〳〵笑ふ。）

茶屋娘。　さうは云ふものゝ、その變つた風俗が御意にかなうたと見えて、お前にもこの頃は深いお馴染があるとか聞きました。お隱しなさるな。さつきも浪路さんがこの店さきを通りましたぞ。

勝四郎。　やはり五つ衣に緋の袴を穿いてか。

茶屋娘。　あい。一際目立つて美しくみえました。

勝四郎。　おまへにも美しく見えたか。いや、ありがたいなう。

茶屋娘。　おほゝゝゝゝゝ。

女房。　ほんに氣輕で面白いお人ぢや。風俗といひ、詞のなまりでは、上方のお人でも無ささうな。

勝四郎。　鎌倉あたりのお生れでございますか。

旅の娘。　お察しの通り、關東育ちには相違ございませぬが、鎌倉とはずつと懸け離れた、下總は葛飾の郡、眞間の里に生れたものでございます。

勝四郎。　下總の眞間といふのは、手兒奈の舊蹟のある所ではございませぬか。

旅の娘。　よう御存じ。すなはち手兒奈の舊蹟で、祠もあれば繼橋もあり、歌をよむ人にはお馴染のところなれど、いやもう草ぶかい田舍でございます。お通りがかりの節には些とお立寄り

くださりませ。と申したところで、わたくしも旅から旅をながれ渡る商人、なん時わが家へ歸らうやら判りませぬ。先づこゝをわたくしの宅と思召して、お茶なとゆる〳〵と召しあがりませ。

旅の娘。　ほんにおどけたことばかり云ふお人ぢや。

女　房。　さうして旅から旅をあるいてお出でなされたら、さぞ面白いことでござりませうな。（空をみる。）どれ、わたし等は暮れぬうちに行きませうか。

勝四郎。　もうお立ちでござりますか。

旅の娘。　どうも失禮をいたしました。

女　房。　お先へ御免くださりませ。

（女房は勝四郎に會釋しつゝ、店口へゆきて茶代を置く。）

茶屋娘。　ありがたうございます。またお歸りにお寄り下さりませ。

女　房。　大きにお邪魔をしました。さあ、來や。

旅の娘。　あい、あい。

（二人は上のかたへ去る。勝四郎はあとを見送る。）

勝四郎。　わしが調子に乘つてべらべらとしやべるので、あの人達も呆れてゐた樣子だ。はゝゝゝゝは。（海を望む。）おゝ、春の海はおだやかに晴れて、青い浪のあひだに白帆のかげや鷗の聲……。かういふ處にゆつくり遊んでゐると、人間の苦勞といふことをわすれて、氣がのびのびするなう。

（娘が汲んで出す茶かのみて、勝四郎は海のけしきを飽かずに眺めてゐる。上のかたより大内の家臣萩野七郎、廿二三歳、風流なるこしらへにて笠をかぶり、荷持男重助の襟髪をとりて出づ。あとより小姓一人附き添ひ出づ。）

重　助。　あゝ、もし、御免くださりませ。

七　郎。　往來にて武士の足をふみながら、挨拶もせずに逃ぐるとは無禮な奴ぢや。

勝四郎。　や、青樣は重助でないか。

重　助。　おゝ、旦那殿。どうぞこのお武家樣にお詫びなされてくださりませ。

（勝四郎怖る怖る進み出づ。）

勝四郎。　おそれながら申上げます。それなるはわたくしの奉公人、どのやうな粗相を致しましたかは存じませぬが、わたくしが代つて幾重にもお詫を申上げますれば、どうぞ御料簡くださ

りませ。

七郎。　では、こやつはお身の家來か。

勝四郎。　さやうでござります。平生から我殺の粗忽者でございますれば、さだめて重々の御無禮をさやうでございます。働きましたでもございませうが、わたくしからも屹ど叱り置きますれば、今日のところは何分にも……。

七郎。　今日は赤間の先帝祭、遊女の行列を見物せんとて、忍び編笠に面をかくし、阿彌陀寺へまねりし下向路に、這奴うろ〳〵來かゝりて、土足でしたゝかに踏んだるのみか、一言の挨拶もせず逃去らんとするは、あまりに禮儀を知らぬ奴、以後のみせしめに引立てゝまゐつたのぢや。

重助。　美しい太夫達が行くもあれば歸るもあり。その艶かなのに見惚れてゐるうちに、つい粗相でお前さまの御草履を踏みましたが、みれば立派な御武家様、どのやうな御咎を受けようも知れぬと御挨拶も致さずに逃げましたは、わたくしが重々の不調法、まつぴら御免下さりませ。

勝四郎。　どうぞ御勘辨をねがひます。

七郎。　よい、よい。主人までお口を添へて詫ぶるとあれば、今日のところは先づ免して置く。

（襟髪を取つて突き放せば、重助よろけて倒れんとするを、勝四郎あわてゝ抱きとめる。）

勝四郎。　格別の思召、ありがたう存じます。

重助。　へい、へい。ありがたうございます。

（二人は禮をいふ。七郎は笠をぬぎて床几にかゝる。）

茶屋娘。　お出でなされませ。

（娘は茶をくんで出す。七郎はしづかに扇をつかひながら四邊をながめる。）

七郎。　どうぢや、犬稚。（小姓を見かへる。）けふは美しいものを見たであらうな。

小姓。　聞きしにまさる賑ひでございました。

勝四郎。　では、お前様がたも太夫の行列を御覽なされましたか。

七郎。　おゝ、目も醒むるばかりに華やかなものであつた。左布流が媚びは萬葉集に殘り、長柄が姸きは忠見の集にも止めたれど、それは見ぬ世の傀儡女ぢや。いま眼のあたりに此のありさまを見るからは、暮れゆく春も榮ありて、いづれか櫻ならぬはない。武士のたましひも蕩くるわ。はゝゝゝ。

勝四郎。　ごもつともでござります。お歴々のおまへ様方さへ左様に仰せられまするものを、ましてわれ〳〵どもが魂のおきどころを忘れてうか〳〵と浮れ出すのも無理はござりませぬ。なにをお隠し申しませう。わたくしは關東の足利絹を商うて、旅から旅を渡つてあるく者でございますが、京はよい所と聞きましたので、澤山の代物を仕入れ、これなる男を供につれて、はる〳〵上洛いたしますると、見ると聞くとは大きな相違で、かの應仁のいくさ以來、九重の都といふも名ばかりで、大路小路は見る影なく荒れ果てました。なう、重助。

重助。　今でも軍の沙汰はやまず、やれ細川の、三好の、畠山のと、毎日たがひにいがみ合うて、行く先々で切ツつ拂ツつ、うか〳〵してゐたらどんな傍杖を受けうも知れぬと、命からがら浪華へ下りましたが、こゝも都に近いので、思はしい商賣もござりませず。又ぞろ中國筋へながれ渡りました。

勝四郎。　その中に人の噂をきけば、周防長門は大内様の御領分で、こゝらには軍の沙汰もなく、都にもおさ〳〵劣らぬ繁昌とうけたまはりましたので、播磨路から備前備後を越えて、やうやう御當地へまゐりますると、なにさま聞きしにまさる家の作り、人の風俗、町の賑ひ、廓の繁昌、中國の果にもこんな好いところがあるのかと、實にびつくりいたしました。たとへて申せば地獄から極樂へ引越したやうなもので、商賣物はどん〳〵賣れる。面白い遊び場所は澤山ある。それやこれやで歸るを忘れて、昨年の十月から半年ほどもうか〳〵と長逗留をいたして居ります。

重助。　わたくし共も極樂のやうなこの土地へ來たおかげで、やう〳〵命の洗濯を致しました。

七郎。　はゝ、極樂のやうぢやと申すか。他國のものには左程のよい土地と見ゆるかなう。（すこしく誇りがに打笑む。）それがしは大内家譜代の家來、幼少のころより山口に育つて、この赤間ヶ關へもをり〳〵に遊びにまゐるが、流石にむかしより船着の場所だけあつて、出船入船で晝夜の賑ひ、先づは繁昌の土地と申してよからうな。

勝四郎。　誰しも一口に京難波津と申しますが、わたくしどもの見まするところでは、京や浪華にましたる繁昌。これも御領主大内様の御威勢と、唯々おそれ入つて居ります。

七郎。　それがしの口から申すも如何ぢやが、先づ當時中國はいふに及ばず、四國九州にわたつて、富といひ、力といひ、御當家と肩をならぶる者はあるまい。

重助。　その御内の方に對して無禮を働きましたは、いよ〳〵以て恐れ入つたる儀で、なんとも申譯がござりませぬ。

茶屋娘。（上の方をみる。）あれ、あれ、御覽じませ。お祭りから戻りの太夫さん達が、五人六人打揃うて、こつちへ練つて來られまする。

七郎。なにさま遊女の一群が打連れてこれへまゐるわ。

小姓。おゝ、あのなかには入江殿も見えますする。

七郎。なに、入江が見ゆるか。（思はず起ちあがる。）

重助。おゝ、浪路どのも見えますぞ。

勝四郎。え、浪路が來たか。

二人。（勝四郎も思はず起つて上手へ行きかゝり、七郎につき當りて、たがひに顏を見合せる。）はゝゝゝゝゝ。

（上のかたより赤間の遊女入江、浪路、刈藻、磯萩、白縫、八島の六人、いづれも官女の姿にて出づ。かむろ千鳥もあとより出づ。）

入江。おゝ、七郎どの。これにゞさんしたか。

七郎。先刻からお身たちの歸るをこゝに待つてゐたのぢや。

刈藻。そりや嘘でゞさんせう。

白縫。お前の口には油斷がなりませぬ。

（勝四郎はひそかに手招きすれば、浪路はうなづきてその傍に來る。磯萩も八島もつゞいて來る。）

浪路。お前もこゝに待つてゐて下さんしたのか。

勝四郎。待つてゐたとも、待つてゐたとも、この首が千切るゝほどに長く伸ばして、さつきから一時も待つてゐたのだ。

磯萩。わたし等もおまへに見せうと、今日はこのやうに扮裝つて出ましたぞ。

七郎。いや、遊女には手管とやらがある、町人、かならず氣を許すなよ。

勝四郎。どう致しまして……。わたくしが馴染の女にかぎりましては、そんな詐り者は一人もとざりませぬ。

八島。その眞實に打込んで、浪路さんは明けても暮れてもおまへの噂ばかり……。

重助。こりやどうやら當てにならぬぞ。

勝四郎。えゝ、貴樣の知つたことか。默つてゐろ。

七郎。いや、面白うなつて來た。廓の遊びには武士も町人も隔てはあるまい。かう見たところが氣輕さうな男どもぢや。今宵はそれがしと一緒に飲まぬか。どうぢや。

重助。それはまことにはや、有難い儀で……。

勝四郎。え、、また差出るか、引込んでゐろと云ふに……。折角の仰せではございますが、わたくしは些と其、ほかに約束がございまして……。

浪路。ほんにこのお人は、今夜わたしのところへ來る約束がありまする。ほかへ滅多に遣ることではございませぬ。

勝四郎。この通りの色男。御覽くださりませ。

七郎。なるほどなう。

磯萩。（重助にむかひて。）猛將の下に弱卒無しとやら、いつぞや太平記讀みから聞いたことがある。

八島。旦那殿がこの通りなら、おまへも定めて色男でございませうな。

重助。勿論、勿論。これでも故郷の下總では、女を七人ばかり殺した男だ。なんと凄いことであらうがな。

入江。（七郎に。）もし、七郎殿。あちらにばかり勝手に物云はせて、お前は默つてゐなさんすのかえ。

刈藻。お前もこゝで負けぬやうに、入江さんとの戀物語でもしなさんせ。

白縫。他國の人に云ひ負かされては、お國のお武士の恥になりますぞや。

七郎。はて、措いてくれ。それがしの風流は訓も承知の上ぢや。今更こゝで事新しう云ふにはおよばぬ。なう、犬稚。

小姓。左樣でございまする。先づこの赤間ヶ關で名高いものは、第一が阿彌陀寺の御陵、第二が龜山の八幡宮、それに次いでは廓にならびなき殿の御全盛でございまする。

勝四郎。これは又えらいことを云ひ出したものだ。はゝゝゝゝ。

遊女六人。ほゝゝゝゝ。

（みな〳〵笑ふ。下のかたより歌占の女、片手に笠を持ち、かた手に短冊あまた着けたる枝を持ちで出づ。）

浪路。おゝ、いつもの歌占が來た。

入江。呼んで見ようではございませぬか。

歌占。歌占の御所望はございませぬか。神のこゝろは歌にあらはれまするぞ。（七郎等にむかひて。）不知火の筑紫のことも問ひたまへ。（勝四郎等にむかひて。）よしあしの浪花のことも問ひたまへ。如何でございまするな。

浪路。　わたし等は度々のことで珍らしうもない。（勝四郎に。）お前、占うて貰ひなさんせ。

入江。　お前もどうでござんすな。

七郎。　それも一時の興ぢや。さらば歌占、先づそれがしから占うてくりやれ。

歌占。　はい、はい。かしこまりました。

（女は笠を措きてひざまづき、持つたる枝をうや〳〵しく押頂きて、二三度うち振り、更に七郎のまへに進む。）

歌占。　あめつちの神々を心に念じ、眼をとぢてお引きくださりませ。

七郎。　よい、よい。

（七郎は眼をとぢて一枚の短冊をひく。女は取つて見る。）

歌占。　翌ありと思ふこゝろの仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは。（よみ終りて。）これはむかしから誰も知る名高い歌、あらためて申上ぐるまでもござりませぬ。

刈藻。　あすありと思ふ心のあだ櫻。

白縫。　よはに嵐の吹かぬものかは。

歌占。　何事も御用心が肝要でござりまする。

重助。　餘りよい辻占でも無いやうだな。

勝四郎。　では、今度はわしが引くぞ。

歌占。　はい、はい。

（女は進んで勝四郎の前にゆく。勝四郎も眼をとぢて短冊をひく。）

浪路。　はて、なんとござんしたえ。

占。　契り置きしさせもの露を命にて、あはれ今年の秋も往ぬめり。（よみ終りて。）これも百人一首でどなたも御存じの歌でござりまする。

勝四郎。　して、そのわけは……。

歌占。　誓ひし詞をたのみにして、今年こそはと待つに甲斐なく、秋は過ぎても便りは無し……。

（勝四郎の顔をみる。）お前は人に待たるゝ身ではござりませぬか。

勝四郎。　なに。人に待たるゝ身とは……。

重助。　はてな。（考へる。）いや、判つた。これは故郷の眞間のお宿で……。

勝四郎。　あゝ、待て、待て。これはそんなことでは無い。おゝ、それ、それ、こゝにゐる太夫が日頃から私の來るのを待つてゐると云ふことであらう。

重助。なるほど然うかも知れませぬ。

七郎。どうぢや。そちらの占方は……。

勝四郎。先づよいと致して置きませうか。

七郎。兎もかくも價を取らすぞ。彼の町人の分も一緒に取つてくりやれ。

（七郎は錢をやる。）

歌占。ありがたうござりまする。

（女は錢をうけ取りて徐に去る。風ふきて櫻の花ばら〳〵と散りかゝる。）

小姓。殿、御覽じませ。櫻の花が蝶のやうに、ひら〳〵と舞うて落ちまする。

七郎。翌ありと思ふこゝろの仇櫻ぢや。どうやら夕風が薄寒うなつて來た。

入江。ほんに風が寒うなつて來ました。

浪路。春の日は長いやうでももう暮れかゝる。

刈藻。廓でもやがて火をともす頃であらう。

磯萩。どれ、わたし等は一足さきへ行きませうか。

白縫。七郎どの、あとから屹と來なさんせ。

八島。勝四郎どのも待つてゐますぞ。

七郎。わしもすぐに後から行かうほどに、座敷を清めて待つてゐやれ。

勝四郎。わしも一旦宿へ歸つて、すぐに出直して行くとしようよ。

入江。（七郎に。）その約束を忘れさんすな。

七郎。よい、よい。

浪路。（勝四郎に。）今夜は面白いことして遊びませうぞ。

勝四郎。さうだ、さうだ。天井ぬけに騒ぐとしよう。

刈藻。では、お先へ。

六人。ゆきますぞえ。

（遊女六人は禿を伴ひて下の方へあゆみ去る。）

小姓。殿、おまへ樣ももうお越しなされませぬか。

七郎。そちも廓へ早う行つてみたいか。はゝゝゝゝ。

（七郎しづかに起たんとする時、大内の家臣山口平馬、小具足の上に蓑笠をつけて出づ。）

平馬。おゝ、七郎どの。これにござりましたか。

七郎。お身は山口平馬でないか。いかめしい扮装で何しにこゝへ……。

平馬。うか〳〵してゐる時節でござらぬ。お家の大變を御存じないか。

七郎。なに、大變とは。

平馬。陶權頭晴賢入道、にはかに謀叛を企てゝ、一昨日のゆふ六つ頃、山口の御屋形へ攻めかけました。

七郎。陶晴賢の謀叛とは……。して、御主君にはなんとせられた。

平馬。宿直の面々はわづかに六十餘人、必死となつて防げども、敵は眼にあまる大軍にて、しかも屋形へ火をかけたれば、物の半時とも堪へがたく、矢種のこらず射盡して、御主君はうづまく烟のうちに御生害、その餘の人々も思ひ思ひに討死して、さすが結構を凝らせし御屋形も、一夜のうちに灰燼となつて失せ申した。

七郎。して、御臺や公達は……。

平馬。右御二方のゆくへ知れねば、我々はかやうに人目を忍んで、所々方々をおたづね申して居るところぢや。心も急けば、これにておわかれ申す。御免。

（云ひすてゝ、平馬は早々に去る。七郎は呆れてあとを見送る。）

七郎。思ひもよらぬお家の大變……。

小姓。まことに夢のやうでござりまする。

七郎。謀叛人に御家をほろぼされて、歸るに家なき身となつたわ。

勝四郎。こりや飛んでもないことになりました。

七郎。廓の酒のさめぬ間に、歡樂の夢はたちまち醒めた。

勝四郎。極樂だと思つてうか〳〵油斷してゐたら、こゝもやつぱり地獄であつたか。

（七郎と勝四郎は茫然たり。風ふきて、さくらの花又もや散りかゝる。）

重助。戀と無常の早替りは、あんまり飽氣ないことだなう。

（重助も、歎息す。勝四郎も嘆息して腕をくむ。）

七郎。兎にもかくにも猶豫はならぬ。宿へ歸つて支度をとゝのへ、一先づ山口へ引返して、その後の成行を見るといたさう。犬稚、まゐれ。

小姓。はあ。

勝四郎。では、お立ちでござりますか。

七郎。おゝ、町人。命があらば重ねて逢はう。

（七郎は小姓をつれて、上の方へいそぎ去る。勝四郎は又もやぢつとなりて腕をくむ。）

重助。　あのお武家はあんまり慌てたので、茶代も置かずに行つてしまつた。

茶屋娘。　毎度御贔屓になつたお客様でございますれば、わづかのお茶代などはどうでも宜しうございますが、大内のお家が滅亡とは、とんでもない大變でございまするな。

重助。　中國四國九州に威勢をふるつた大内のお家も、一夜のうちにほろびるとは、脆いとも果敢ないとも云ひやうのない始末だ。もし、旦那殿。なにをうつかりと考へてゐるのでございます。

（勝四郎答へず、猶もぢつと俯向きゐる。）

重助。　もし、もし、旦那どの。どうなされたのでございます。旦那……旦那殿……。

勝四郎。　はて、さう〳〵しい奴だ。今の話を聞いたので、わしは俄に氣合が悪くなつて來た。

重助。　それは困つたものでございますな。では、この茶店の奥へ這入つて、氣つけの藥でもお飲みなされませ。

茶屋娘。　まあ、奥へ行つて些とのあひだお休みなされませ。

重助。　さあ、お出でなされ。

（重助と娘は勝四郎をつれて、茶店の奥に入る。上のかたより大内家の侍女小雪、旅すがたにて笠を持ち、腰に小刀を佩び、大内の公達龍王丸を守護して出づ。）

小雪。　こゝまで無事に落ち延びてまゐりますれば、追手のかゝる氣遣ひもございますまい。しばらくこゝで御休息遊ばしませ。

（小雪は龍王丸をいたはりて床几にかけさせる。）

龍王。　こゝは何といふところぢや。

小雪。　こゝは赤間ヶ關でございまする。これから便船を求めて九州へ落ちますれば、御運の開けるは瞬くひまでございませう程に、かならず御案じなされまするな。

龍王。　陶の入道めは憎い奴ぢやなう。

小雪。　おゝ、憎い奴でございまする。みだれたる世とは申しながら、重代相恩の御主君を攻めほろぼし、おのれが代つて位を取らうとは、獣にも劣つた人非人でございまする。

（下のかたより梟雄の山口平四郎かゞひ出づ。）

平馬。　小雪どの、不忠臣をところでお目にかゝつた。して、御奥様は……。

小雪。　申上ぐるも涙の種……。門入をぬけて落つる途中、おいたはしや御奥様には、流れ矢にあ

たつて敢ない御最期……。

平馬。すりや御臺様には御最期とな。して、お身達のゆく先は。

小雪。しかと定まつた的もなけれど、兎にもかくにも向地へ……。

平馬。九州へか。いや、それは危い。それがし御案内申上るほどに、やはり陸地を歩ませられい。

小雪。して、そのおちつく先は。

平馬。陶入道殿の御屋形へ……。

小雪。え。さてはそなたも謀叛の黨か。

平馬。（あざ笑ふ。）推量の通り、われ等も陶どのに荷擔して、謀叛の徒黨に加はりし一人。ゆくへ知れざる御臺所や公達をさがし出して手柄にせうと、こゝらあたりに網を張つてゐたのぢや。女子のお身に用はない。公達をわたして勝手にゆかれい。

小雪。えゝ、不忠不義の山口平馬、おのれ等ごとき犬侍に、大事の公達を渡してならうか。

平馬。渡さぬとてそのまゝに免さうか。敵對して後悔せられな。

小雪。なにを……。

（平馬は進んで龍王丸を引立て行かんとす。小雪は遮りて小刀をぬく。平馬も太刀をぬきて鬪ひ、双方ともに傷つきしが、小雪は遂に斬倒さる。萩野七郎は衣服の下に籠手をつけ、袴をくゝりて脛當をはき、小姓も袴をくゝりて素足になり、いづれも旅裝束にて走り出づ。かくと見るより小姓は龍王丸をかこひ、七郎は太刀をぬき、平馬に斬つてかゝる。平馬は鬪つて遂に斬り伏せらる。）

七郎。犬稚。ともかくも公達をあれへお伴ひ申せ。

小姓。はあ。先づかうお出でなされませ。

（小姓は龍王丸の手をひきて、上のかたへ走り去る。七郎は小雪をかゝへ起して耳に口をよせる。）

七郎。小雪どの、心をたしかに持たれい。小雪……小雪どの……。平馬は七郎が討取つたぞ。

小雪。（やうやく眼をひらく。）おゝ、七郎どの……。公達は……。

七郎。公達はそれがしが確に守護いたした。さるにても傷は淺い、かならず弱るな、氣を落すまいぞ。

小雪。あい。（云ひつゝまた弱る。）

（茶店のうちより勝四郎は茶碗を持ちて窺ひ出づ。）

勝四郎。もし、氣つけのお藥はわたくしがこゝに持つて居ります。兎も角もこれを……。

七郎。おゝ、かたじけない。

（七郎は茶碗をうけ取りて小雪の口にふくませる。小雪は七郎の手にすがる。）

小雪。　七郎どの……。未來は……未來は……。

七郎。　おゝ、云ふまでもないこと。お身と我とはかねて許嫁の約束もある仲……。遊興にふけりて主家の大變にもありあはず、あまつさへ未來の妻をも救ひ得ぬ……七郎の罪は悔んで返らぬ。ゆるして下され。

小雪。　おゝ。

（小雪は苦しき中にも笑を含み、七郎の手にすがりつゝ又倒る。七郎は地に坐して悲嘆のなみだに咽ぶ。勝四郎も涙をぬぐふ。）

勝四郎。　もうお手當り見込みもございませぬか。

七郎。　傷は急所ぢや。（頭をふる。）今も聞く通り、これはそれがしが許嫁の女子、せめては亡骸の始末をと思へども、こゝろが急けばそれもかなはぬ。近頃迷惑な儀ではあらうが、お身たのまれてはくれまいか。

勝四郎。　よろしうございます。萬事はわたくしが引受けて、このお女中の亡骸は、然るべきやうに取片附けませう。

七郎。　それ承はつて安堵いたした。なにはあれ、人目に立たぬところへ……。

（七郎は小雪の死骸をかゝへ起せば、勝四郎も手傳ひて背後の木かけに運び入れ、兩人合掌す。）

勝四郎。　さらば町人、たのんだぞ。

七郎。　かならず御心配なされますな。

重助。　むゝ。

（七郎行きかけて又もや死骸の方を見かへり、勝四郎と顔をみあはせて兩人黯然。七郎はなみだを拂ひつゝ去る。茶店のうちより重助と娘出づ。）

茶屋娘。　山口で軍騒ぎがあつたと聞いてゐるうちに、こゝでも切合ひが始まるとは、いや物騒なことでございますな。

勝四郎。　わたくしも先刻からどうなる事かと案じて居りました。

（櫻の花しきりに散る。）

（ひとり言のやうに。）旅から旅をさまようて、其日その日をうか〳〵暮してゐたが、どこへ行つても修羅の巷には飽き果てた。さつきの歌占の云うたに嘘はない。遠い故郷にはわしを待つてゐる人があるのだ。

（幾茅が宿）

（下のかたより以前の発出づ。）

千　鳥。　もし、勝四郎どの。浪路さんがさつきから待つて居やんすぞえ。わしと一緒に、さあ御座んせ。

（千鳥は勝四郎の袂をとる。勝四郎は曳かれて一足よろめきしが、徐にその袂を拂ふ。）

勝四郎。　いや、私はもう歸るのだ。

千　鳥。　歸るとは、どこへ……。

勝四郎。　遠い故郷へ歸るのだ。

重　助。　え。

（重助は怪みて勝四郎の顏をみる。勝四郎は腕をくみて暮れゆく空を仰ぐ。櫻の花みだれ落ちて、ゆふぐれの鐘遠くきこゆ。）

——幕——

下の巻

下總國、葛飾の郡、眞間の里。二重屋體の古き家は荒れにあれて、茅の軒はかたむき、竹の緣は朽ちたり。入口には破れたる竹の門ありて、庭にも外にも秋草おごろに生ひ茂れり。門のそとには松の大樹あり。

おなじ年の秋のはじめにて、日も已にくれ果てたる頃。

（勝四郎は旅姿にて笠を持ちて出で、ゆふ月の光にあたりを見まはして立つ。）

勝四郎。　おゝ、こゝだ、こゝだ。この松の大木がたしかに目じるし……。とは云へ、家のさまも思ひのほかに荒れ果てゝ、人が住んでゐるやうにも見えぬ。もしや空屋になつてしまつたのではあるまいかな（おぼつかなげに内をのぞく。）もし、もし、御免なされませ。どなたも居らぬか。御免なされ。たのみます。

（門のそとより音なへば、奥より勝四郎の女房宮木、二十五六歳、色蒼ざめて姿窶れたるが、襟にむすびたる髪を長く垂れて出づ。）

宮　木。　どなたでござりますな。

浅　茅　が　宿

勝四郎。絹商人勝四郎の宿はこれでござりましたな。

宮　木。さやうでござります。して、お前様は……。

勝四郎。さういふ聲は……。

（双方たがひに透し視る。）

勝四郎。おゝ、女房でないか。

宮　木。え。（思はず縁より降りる。）おゝ、勝四郎どのか。

勝四郎。その勝四郎が今戻つたのだ。

宮　木。おゝ、戻られたか。

（宮木は走り出づ。勝四郎も門を押倒して走り入り、夫婦は取りすがりて少時詞もなかりしが、宮木はなみだを拭ひて云ふ。）

宮　木。ようまあ戻つて來てくだされましたな。

勝四郎。あきなひの爲めに旅から旅をさまようても、こゝは我家だ。戻らいでなんとせうぞ。お前に變ることもなかつたか。

（優しく問へば、宮木はさめ〴〵と泣く。）

勝四郎。はて、かうして無事にめぐりあふからは、泣くことも嘆くことも何にもない。委しいことはゆる〳〵話さう。兎もかくも洗足の水を持つて來てくれ。

宮　木。あい。

（宮木は上の方の奥にゆく。こゝには土饅頭がきづきて、新しき卒塔婆を立て、閼伽桶には白桔梗の花をさしたり。宮木は花をぬきて縁先に置き、閼伽桶を持ち來る。勝四郎は縁に腰をかけて草鞋をぬぎ、足を洗ひつゝ更にあたりを見まはす。）

勝四郎。わしがこゝの家を去つてから、數へてみれば足かけ七年になるが、しばらく見ぬ中にひどく荒れて、狐狸の棲家も同様だ。

宮　木。あるじの無い家には狐も棲み、狸も棲みます。かうしたあばら家に女子ひとりで、七年の月日を住みわびた悲しさ、心細さを察してくだされ。

（宮木また泣く。勝四郎は面目なげに頭をかく。）

勝四郎。その恨はもつともだが、わしの方にもまた色々の仔細がある。（又もや家内を見まはす。）なにしろもう日が暮れたに、あかりの用意はどうだな。

（云ひつゝ縁にのぼりて座を占むれば、宮木は桶の水をすてゝ、これも内に入る。庭には蟲の聲。）

宮　木。　このあたりは四年前から軍のさわぎで、住む人も四方へ皆ちり〳〵、里は寂れ、田は荒れて、こゝ二里や三里のあひだには油を賣る家もございませぬ。月のある夜は月あかりを便りにし、暗き夜は暗きがまゝに、あくるのを待つて居ります。

勝四郎。　それは定めて不自由なことであらう。幸ひ今宵は月が明るい。庭にすだく蟲の音を聽きながら、軒もる月をあかりとして、一夜を語りあかすも風流かも知れぬ。さて斯うして久振りで逢うてみると、云ひたいことも數々ある。先づなにから話してよからうか。

宮　木。　わたしとても云ひたいことは山ほどあれど、まあ、お前から先へ聞かしてくだされ。

勝四郎。　女房、堪忍してくれ。故郷のこともお前のことも、實は今まで忘れてゐたのだ。

宮　木。　え。

勝四郎。　と云つたら、さだめて不實な男と恨みもせうが、あづまも先年から兵亂つゞきで、思はしい商賣も無いまゝに、こりやいつそ花の都へ押上つて、幾層倍の儲けをみるが優しだと、田畑をも賣り盡して金にかへ、足利絹をあまた買ひ積んで、あの重助を供に連れ、はるばると京へ上つたのは、今から七年のむかしであつた。

宮　木。　商人が旅するは渡世の習、珍らしからぬことではあれど、鎌倉や足利へのゆき通ひに、七日十日の旅寢すら、留守は女子のさびしいものを、百里にあまる京上り、歸りくる日はいつとも知れぬ。悲しいわかれも人の世の、逃れぬ定めと諦めて、泣いて送つた女房を、おまへは忘れてゐなされたか。（泣く。）

勝四郎。　それが懺悔だ、聞いてくれ。目ざす都へのぼつて見れば、みだれたる世の淺ましさ、冠も笏も地に墜ちて、みやこも鄙もおなじく荒れた。あけても暮れても軍の沙汰で、商賣などは思ひもよらねば、早々に浪華へ落ちてゆくと、こゝもまた同じこと。それからそれへと流れ〳〵て、長門の果までゆき着くと、こゝは流石に大内殿の御領分、世もおだやかで町も賑ひ、あきなひも繁昌して金も儲かる。この世からなる極樂とはこゝのことだと、その面白さにわれを忘れて、半年あまりも夢のやうに遊び暮してゐたのだ。

宮　木。　家を忘れ、女房をわすれ、我を忘れてゐるほどの面白いところから、お前はどうして歸られました。

勝四郎。　さあ、その面白いといふのも些との間で、極樂はやはり地獄であつた。過ぎし三月の二十四日、赤間ヶ關の先帝祭を見物に出て、大内家のある若侍と懇意になり、面白さうに廓話などしてゐると、にはかに謀叛が起つたといふ噂で、花に嵐の亂騒ぎ、わが眼の前で斬

合ひがはじまつて、敵が死ぬやら、味方が死ぬやら、眼もあてられぬ體たらく。しかもその殺された女子には許嫁の男があつて、死ぬる際までその男の手に取縋つてゐた。（思はず涙たぬぐふ。）あゝ、惨らしいことだと思ふにつけ、故郷のことや女房のことが一時にこの胸に湧いて來て、みやこも鄙もかはりなく、人間はどこへ行つても修羅の巷、なにを樂みに何をたのみに、遠い他國にうか〳〵と夢のやうに暮してゐることぞ。とても此世が地獄ならば、やはり住み馴れた故郷に戻つて、貞節な女房と仲むつまじう暮すがせめても優しだと、わしも俄に悟りを開いて、その夜のうちに發足した。

宮　木。　では、行く先々で軍がはじまり、いづこも同じ修羅の世のなかと悟られたか。

勝四郎。　悟つた、悟つた。後に聞けばその時の若い侍も、龍王丸とかいふ御主君の公達を守護して落ちる途中、大勢の敵にかこまれて、これも二人ながら果敢ない最期を遂げたとやら…。見るも聞くも忌なことばかりで、いよ〳〵故郷が戀しくなり、一日も早く戻らうと心はいそげど、生憎に又あの重助めが途中から急病を發して、箱根向うの三島の宿で……。

宮　木。　おゝ、重助が病氣になつて……。

勝四郎。　到頭これも死んでしまうた。

（勝四郎嘆息す。宮木も泣く。）

勝四郎。　そのあと始末や何や彼やで、思ひのほかに日數も嵩つて、夏の末に秋風のふく時分とまつたので、いよ〳〵歸りの急がれて、けふの夕方やう〳〵戻り着いた眞間の故里……。やれ嬉しやと見まはせば、わづか七年ばど見ぬうちに、なても變り果てたもの……。いにしへの繼橋も跡斷えて、變らぬものは水の音ばかり、たま〳〵途で逢ふ人も昔馴染はひとりもない。村も田畑も荒れ果てゝ、いづれが自分の住家かと、龍宮から戻つた浦島のやうに、しばしは尋ね迷うてゐたよ。

宮　木。　七年以前にくらべると、この里も世が違ふやうに變り果てました。小田原の北條殿と安房の里見殿とが度々の合戰で、鴻の臺から眞間のあたりは、軍馬の蹄に年々踏みあらされ、家は燒かれ、人は逃げかくれて、田には耕す男もなく、家には機織る女もなく、一時は人なき里と見るまでに衰へましたが、軍もこのごろ少しく鎭まつて、他國にかくれた人々も次第にそちこちから戻つて來ました。

勝四郎。　そのあひだお前は何うしてゐたのだ。

宮　木。　何時お前が戻らうも知れぬものを、どうしてこゝを立退かれませうぞ。いかなる難儀を忍

ぶとも、夫が再び歸るまではかならず此家を離れまいと、辛い悲しいおそろしい數々を堪へ〳〵て、あるに甲斐なき世を送りながら、兎もかくも今日まで生きてゐました。

勝四郎。聞けば聞くほど面目ない。それほどの艱難辛苦を堪へて、たよりもない夫を待つてゐてくれた志、今あらためて禮をいふぞ。七年このかたの不實や無沙汰はこの通りあやまつてゐる。ゆるしてくれ。

宮　木。たとひ一旦は忘れられても、かうして歸つて來てくだされば、今まで生きてゐた甲斐もあると云ふもの。廣い世間にはわたしよりも不運な女子があつて、別れし夫の戻らぬ中に、土となつたのもあるとか聞きました。これ、御覽なされ。（緣端に置きたる白桔梗を把る。）この花について悲しい話がございます。

勝四郎。とは又、どんな話だな。

宮　木。やはりお前とおなじやうに、遠い他國へあきなひに出て、幾年も歸らぬ男がございました。その女房は待ちこがれて、半年あまりの長煩ひに遂にこの世を去りました。（涙をぬぐふ。）死ぬる際に遺言して、わたしの墓の傍には白い桔梗を栽ゑてくれ。桔梗の花さく秋になれば、夫はおほかた戻つて來よう。それを妾のたましひぢやと云うて、夫に見せてくださりませと……。（泣き入る。）

勝四郎。それは哀れな話だなう。して、その桔梗の花は咲いたか。

宮　木。このやうに白く咲きました。

勝四郎。して、その夫は戻つたか。

宮　木。さあ、戻つたとてももう遲い。（また泣く。）あたりの人々も哀れに思うて、誰が作り出したともなしに、このごろ歌ひ始めた『白桔梗の歌』と云ふのがございます。歌も哀れ、節もあはれ、聞いても涙がこぼれるやうな。

勝四郎。その歌の文句といふのは……。

宮　木。お望みならば歌ひませう。

（宮木は白桔梗の花を持ちて、する〳〵と庭に降り立つ。）

宮　木。白桔梗、かたみに殘る白桔梗……。

唄『花がひらけば秋が來る、あきは來れども人は來ぬ。

宮　木。白桔梗、墓場にうゑた白桔梗……。

唄『人は來ねども花はさく、花はなみだの露に泣く。

（宮木は桔梗の花を持ちて舞ふうちに、勝四郎ばうと〳〵となる。）

勝四郎。　久振りでわが家へ戻つて、疲れが出たせゐか、頻りにうと〳〵と睡たくなつた。

宮木。　もう一度くり返して歌ひます。よう聞いてくだされ。

唄「白桔梗、花がひらけば秋が來る。秋は來れども人は來ぬ。

唄「白桔梗、人は來ねども花はさく、花は涙のつゆに泣く。

（宮木再び舞ふうちに、勝四郎は愈々うと〳〵となる。宮木は桔梗を袖にいだきつゝ、墓の方へゆくよと見れば、すがたは消ゆ。舞臺は俄に暗くなりて、一時は闇に鎖さる。下のかたより里人佐市はむすめお秋を連れて出づ。舞臺再び明るくなる。）

佐市。　この空屋で誰やら話聲がきこえたと云ふのはほんたうかの。

お秋。　先刻わたしがこゝを通つたらは、聞慣れぬ男の聲がきこえました。

佐市。　はて、不思議なことだなう。こゝは當時住む人もないに、日が暮れてから男の聲がきこえるとは……。

お秋。　もしや狐か狸ではござるまいか。わたしはなんだか氣味が惡くなりました。

佐市。　まさかにそんなこともあるまい。もしや盜人の隱れ家にでもなつたのか、但しは行暮らした旅人が一家の宿を借りに這入つたのか。念のために窺つて見よう。

（二人は内をすかして見る。）

お秋。　おゝ、誰やら内に寐てゐる樣子ぢや。

佐市。　兎も角もよび起してみようか。

お秋。　でも、もしや惡漢であつたら……。

佐市。　なに、なに、心配することはない。まあ、待つてゐやれ。

（佐市は内に入る。お秋は門口にて窺ひゐる。）

佐市。　おゝ、草鞋がこゝにぬいである。おゝ、笠もある。（勝四郎の服裝をながめて。）もし、旅のお人……ちよつと起きさつしやれ。これ、旅のお人。

（よび起されて、勝四郎は初めて眼をひらく。）

勝四郎。　おゝ、うか〳〵と假寐をしてしまうた。女房は……。や、宮木はどこへ行つた。女房……女房……。（あたりをうろ〳〵見廻はす。）

佐市。　なに、女房……。では、こなた一人ではなかつたのか。（鼠をすかし視る。）や、こなたは勝四郎どのではないか。

勝四郎。　え。（佐市の顔をみる。）おゝ、こなたは佐市どのであつたか。

佐　市。　さうだ、さうだ。以前はとなりに住んでゐた佐市おやぢだ。して、こなたはいつこゝへ戻られた。

勝四郎。　一時ほど前に戻つたばかりでござります。それにしても女房は……。

佐　市。　女房とは宮木殿のことか。

勝四郎。　おゝ、今の今までこゝにゐたに……。

佐　市。　え。宮木殿がこゝにゐたと……。こなたは夢でも見たのであらう。まあ、よく見さつしやれ。こゝが人の住んでゐる家か。疾うの昔に空屋になつてゐるのだ。

勝四郎。　え。空屋になつてゐる……。して、女房は……。

佐　市。　その女房については、悲しい話が色々あるのだ。

（佐市は朽ちたる竹縁に腰をかける。お秋もすゝみ入る。）

お　秋。　勝四郎どの、お歸りなされましたか。

勝四郎。　おゝ、お秋坊か。わづか見ぬ間に立派な娘になつたなう。

佐　市。　思へば月日は早いものだ。こなたが旅へ出られてから七年になる。宮木どのが世を去つてからも既う三年だ。

勝四郎。　え。宮木がこの世を去つたと……。

佐　市。　まあ、これを見さつしやれ。

（佐市は勝四郎を誘ひて上のかたへゆく。勝四郎は氣もそゞろなる體にて、跳足のまゝに附いてゆく。佐市は土饅頭を指して云ふ。）

佐　市。　宮木どのは一昨年の秋からこゝに住んでゐるのだ。

（勝四郎はおどろきて聲も出でず、地に坐して眼をみはるのみ。）

お　秋。　こゝらあたりも軍のさわぎで、大抵の人は一旦逃げ散つたれど、宮木殿ばかりはお前の歸るを待つて……。

勝四郎。　おゝ、わしの歸るを待つて……。

お　秋。　一人でこゝに殘つてゐられましたが、幾年經つてもお前のたよりは無し、あまりのことに待ち侘びて、半年ばかりのぶら〳〵病……。あとは察して下さりませ。

（お秋泣く。佐市も眼をぬぐふ。）

佐　市。　いまはの際にわし等を呼んで、もしわたしが死んだらば、墓の傍に白い桔梗を栽えてくれ

と……。

勝四郎。　や。（愈よおごろく。）それは唯つた今、女房から殘らず聽きました。白桔梗の歌の悲しい話も……。

お秋。　では、こゝへ宮木どのが假に姿をあらはして……。

勝四郎。　大方さうでござらうよ。（なみだを拭ふ。）今まで確にそこにゐたが……。

佐市。　はて、居る筈がない。宮木殿のたましひがこの墓の下から迷つて出て、こなたに久しい恨を云つたのであらうよ。

勝四郎。　では、今までこゝにゐたのは、この世の人ではなかつたか。（嘆息する。）日本國中、どこへ行つても地獄だと悟れば故郷がなつかしく、早々に歸つて來てみれば、こゝも昔の春ならで、悲しい秋に泣かねばならぬか。

佐市。　人間の世界は皆さうしたものだ。

勝四郎。　さうしたものでござらうか。

（三人は顔を見あはせて黙然。勝四郎は又もや嘆息して墓の前をながめる。）

勝四郎。　わが女房の身の上とは知らずに、先刻はひとごとのやうに聞いてゐた白桔梗……。夜目にも白く咲いてゐる。

お秋。　あらためてお前の手からお墓へそなへてお上げなされ。

佐市。　宮木どのも嘸や喜ぶことであらう。

勝四郎。　せめては心ばかりの追善に……。（桔梗の花を折る。）この白い花を墓にさゝげ、露の深い草のなかに、念佛申して夜をあかさうか。

（勝四郎は墓の前にひざまづく。佐市とお秋は右左より拜む。蟲の聲さびしくきこゆ。）

——幕——

眞田三代記

大正十一年八月作。
大正十一年十月。新富座初演。

初演當時の主なる役割――眞田昌幸（市川中車）眞田幸村（中村吉右衛門）お仙の方（中村歌右衛門）穴山小助（片岡市藏）三上彌平次（中村傳九郎）お鈴（中村時藏）など。

登場人物――眞田安房守昌幸。眞田左衛門佐幸村。眞田伊豆守の室お仙の方。穴山小助。田口七郎。村上清兵衛。三上彌平次。高平善太夫。侍女お鈴。伊豆守の嫡子源三郎。次男内記。百姓藤作、千八。ほかに昌幸と幸村の家來。城内の家來。侍女。小姓など。

第一幕

上州沼田の城外。左右には雜木の大樹おひしげりて、秋草も一面に繁れり。正面に沼田の城遠く見ゆ。

（慶長五年八月はじめの宵。月のひかりは明るく、蟲の聲きこゆ。村の若者藤作、千八の二人は狐を捕る掛罠を持ちて出づ。）

藤作。　月が出たな。

千八。　暗い方が都合がいゝのだが。

眞田三代記

藤作。　いや、やつぱり明るい方がよい。そこで、この罠をかけるには何處らがよからうな。

千八。　なんでも、あいつらの巣に近いところがよからう。

藤作。　その巣が知れゝば仔細はないが、用心のよい彼奴等のことだ。なか〳〵その隱れ家を見せることではないぞ。

千八。　さうかもしれぬな。

（二人は木立のあひだを見まはしてゐる。上の方の木かげより三十四五歳の旅僧出づ。）

旅僧。　これ、これ。

二人。　（びつくりして。）はい、はい。

旅僧。　それは掛罠ではござらぬか。

藤作。　左樣でござります。（罠を見せる。）

旅僧。　獸を捕るのでござるか。

千八。　はい。この頃こゝらに惡い狐どもが巣をつくりまして、食ひものを盜んだり、飼鷄を捕つたりいたしますので、今夜はこの罠をかけようかと存じてまゐりました。

旅僧。　こなた衆は獵夫かな。

藤作。　いゝえ、百姓でござります。

旅僧。　それなれば猶更のことぢや。そのやうな殺生は止めたらどうでござるな。

二人。　（澁りながら。）はい。

旅僧。　くどうは申さぬ。お止めなされ。

藤作。　でも、そこらを暴す惡い奴めでござりますれば……。

旅僧。　惡いと云うても畜生の仕業ぢや。些とぐらゐの惡さは大目に見てやられては何うでござる、な。かへす〳〵も殺生の罪はおそろしい。こなた衆も家には親御や兄弟が待つてござらう。夜のふけぬ中に早うお歸りなされ。

二人。　はい。

旅僧。　お歸りなされ、お歸りなされ。

（云ひすてゝ、旅僧はもとの木かげに入る。二人は顏を見あはせる。）

千八。　見馴れぬ御出家だな。

藤作。　狐を捕つては惡いと云はれた。

千八。　では、このまゝ止めて戻るぶ。

藤作。　さあ。（考へる。）もう一度、聞きたいことがある。あの出家はどこへ行つたな。

千八。　（見まはす。）なんでもあつちへ行かれたやうだが……。

藤作。　（おなじく見まはす。）ほんにどつちへ行つたか、姿が見えぬ。はてな。

千八。　たつた今この木のかげへ這入つたやうだが……。いつの間にか、姿が消えてしまつた。

藤作。　（叫ぶ。）畜生、化けたな。

千八。　なにが化けた。

藤作。　ありや畜生が化けたのだ。

千八。　狐が坊主に化けたのか。（俄にふるへる。）ほんたうに化けたのであらうか。

藤作。　さうだ、さうらしい。うまく坊主めに化けて、殺生の罪はおそろしいなどと、おれ達を嘯したのだ。にくい奴ではないか。

千八。　だが、あれほど上手に化ける狐では、とてもおれ達の手には負へまい。この上に化かされたらどんな眼に逢はうも知れぬぞ。

藤作。　弱いことを云ふな。いくら利口に化け居つても、所詮は畜生の悲しさだ。この罠で屹と捕つて見せる。さあ、来い。あの坊主め、たしかにあつちへ行つたやうだ。（上の方の木かげに行きかゝる。）

千八。　（躊躇しながら。）いゝかな。大丈夫かな。

藤作。　はて、大丈夫だ。来い、来い。

（藤作は先に立ち、千八は不安らしくつゞいて行く。月暗くなりて薄く風の音。向うより眞田安房守昌幸、六十歳ぐらゐ。鎧、障羽織にて馬に乗り、穴山小助が馬の口をとり、田口七郎、村上清兵衛、ほかに家來十餘人出づ。家來の二人は松明を持つ。）

昌幸。　（あとを見かへる。）幸村はまだ見えぬか。

小助。　あとの人數は、まだ續かぬと見えまする。

昌幸。　おそいことぢやな。先づあれで待合はさうか。

（昌幸は舞臺に來りて馬を降り、村上清兵衛が負ひ來りし鎧櫃に腰をかける。蟲の聲。）

昌幸。　わが子の居城とはいひながら、この沼田へ來るは久振りぢや。夜目では確とは判らぬが、そこら一面の草叢でいづれが大手の通路やら。（城の方を見る。）おもひのほかに荒れ果てゝゐるではないか。

小助。　それが伊豆守様の御用心で、御城下は一面の草原。案内知らぬものが迂濶に踏み込みます

ると、陥し穴にかゝるとか申すことでござりまする。

昌幸。なに、落し穴がある。はゝ、流石は信幸め、巧んだな。では、案内がなうては、迂濶には通られまい。小助、その方は忍びの名人ぢや。この草原を無事に通りぬけて、大手の木戸際まで辿りつき、昌幸親子がまゐつたと案内いたせ。

小助。はあ。

七郎。氣をつけておいでなされ。

小助。心得申した。

（小助は馬を十郎に渡し、あさ草をかき分けて、上の方の木かげに入る。）

七郎。（のび上る。）いかにも草が深いやうぢやな。

清兵衛。小助殿の姿が、もう草叢にかくれてしまうた。

七郎。や、あの火はなんぢや。

清兵衛。狐火であらうか。

昌幸。おゝ、狐火ぢや。芒がくれに亂れて燃るわ。面白いなう。

（人々はうしろを見てゐる。この時、上のかたの奥にて、藤作と千八の叫ぶ聲きこゆ。）

二人。狐だ、狐だ。

（上の方より千八走り出で、昌幸等を見て又ぎょっとする。）

千八。や、いつの間にか……。これも狐が化かすのではないか。

七郎。たはけめ。殿に對して無禮を申すな。

清兵衛。退れ、さがれ。

（矢はり上の方より、藤作は以前の旅僧の腕をとらへて出づ。）

藤作。さあ、化狐をつかまへたぞ。千八、加勢して早く縛つてくれ。

（旅僧は無言にて藤作をつき放す。千八は氣味惡るさうに見物してゐる。）

藤作。おのれ、畜生め。

（藤作はまた武者振りつくを、旅僧は無言にて投げ倒す。千八はいよ〳〵恐れて、飛び退く。眞田の家來は松明を差付けて窺ひゐる。）

藤作。うぬ、畜生め。

（藤作は又立ちかゝらうとするを、千八はなほながら昌幸等を指さす。藤作は心づいて驚く。）

七郎。立ち騒がずと、行け、ゆけ。

藤作。はい、はい。

清兵衛。ええ、行かぬか。

千八。はい、はい。

（二人は烟にまかれて、早々に下の方へ逃げてゆく。旅僧は笠のうちより透し視る。）

旅僧。率爾ながら、眞田どのではござりませぬか。

昌幸。いかにも、眞田ぢや。して、こなたは……。

旅僧。（笠を取る。）はじめて御意得申す。拙者は……。（云ひかけて躊躇する。）

昌幸。いや、御遠慮無用。これにあるは皆それがしの腹心でござる。（起つて進み出る。）こなたは、上方より下られたか。はゝ、お隠しあるな。先刻より見るところ、御出家の正體は狐でない。まさしく侍の化けたのぢや。違ひまするか。

旅僧。さすがは眞田殿。御推量の通り、拙者は石田治部少輔の家來、三上彌平次。主人の密使をうけたまはりて關東に走せ下り、取りあへず野州犬伏の御陣所へまゐりし處。ひと足の違ひにて最早お引揚げと相成り、上州沼田へ御立寄りといふ噂に、間道づたひに先廻りして、先刻よりこゝにお待ち申して居りました。早速ながら、これを御覽くだされ。

（僧は七首を取り出して、法衣の襟を裂き、一通の書狀をひき出して昌幸にみせる。昌幸は松明の光にてその書狀を照し見る。）

旅僧。（昌幸の氣色をうかゞひながら。）なにを申すも、火急の場合。書き洩したるところは、拙者より直々に申上げいとのことでござりました。

昌幸。いや、ぬかりのない石田殿。御書面のおもむきは逐一承知いたした。して、伏見の城へは最早取りかけられたか。

旅僧。拙者の出發は當月朔日。伏見も今日よりいよ／＼總攻めといふことでござつたれば、いかに持堪へたところで、三日か四日、疾くに落城いたしたことでござらう。

昌幸。（うなづく。）さうでござらう。相手は鳥居彦右衛門、定めて死物狂ひに働いたことでござらうな。して、伏見が落城いたすからは、上方勢は眞直に、海道筋を押寄せらるゝ御手筈でござるか。

旅僧。勿論でござる。會津の上杉殿と諜じあはせて、双方より挾み擊にいたす計略でござれば、小早川殿、浮田どの、島津、毛利の諸軍勢、早々に勢揃ひして、江戸へ攻め下るに相違ございませぬ。

眞田三代記

昌幸。（再び書狀を見る。）御念の入つたる御狀。あらためて仰せ越さるゝまでもなく、眞田は確かに大阪の御味方でござる。かならず御懸念なきやうと、石田どのへの御返答、よろしくお賴み申すぞ。

旅僧。はあ。

昌幸。江戸の內府もさる者ぢや。居ずくみになつて敵を待つ筈がない。海道北陸ふた手に分れて上方へ攻めのぼるは必定、海道の大將には勿論內府自身が采を執るでござらうが、北陸道の大將は誰であらうか。いづれにもせよ、昌幸が信州上田に楯籠つて、しつかと踏み堪へてあるからは、北陸の人數は屹と食ひとめて、一人たりとも通すまい。これも御心配なきやうと、石田どのへお傳へくだされ。

旅僧。委細承知つかまつる。では、これより、すぐに信州へお越しでござるか。

昌幸。今宵はこ　沼田の城に一泊し、久振りで孫どもの顏でも見て……。（打笑ふ。）明早朝は信州へ立歸る所存でござる。往來なれば御返事の消息もしたゝめ申さぬ。かへすがへすも御主人へよろしく。

旅僧。はあ。心も急げば、これにてお暇申す。

昌幸。東海道はみな敵地、氣をつけてお歸りなされ。

旅僧。はあ。いづれも御免。

（僧は一同に會釋して、下の方に立去る。）

昌幸。（向うを見る。）幸村をはじめ、餘の者どもは何をいたして居るかなう。

七郎。路に迷ふ筈もござりますまいに。あまり遲いことでござりまするな。

昌幸。遲いといへば、小助もまた戻らぬか。（うしろを見る。）揃ひも揃うて氣の長い奴等ぢや。幸村はやがて來るであらう。夜露に晒されて、いつまでこゝに立ち暮してもゐられぬ。馬牽け。

清兵衞。ではござりまするが、お城からはやがてお迎ひがまゐるでござりませう。

七郎。案內しれぬ草原を辿りまして、もし陷し穴でもござりましては……。

昌幸。年よると、氣が短い。べん〳〵といつまでも待つてはゐられぬ。迎ひがまゐるまでもなく、こちらから押掛けに參るであらう。さあ、馬牽け。

七郎。はあ。

（七郎はよんどころなく、馬の口を取りて、昌幸のまへに引き寄せる。）

清兵衞。（向うを見る。）あれ、あれ。松明の火が見えまする。

七郎。　おゝ。あれは狐火でない。たしかに松明ぢや。

家來。　（口々に。）松明ぢや、松明ぢや。

昌幸。　おゝ、幸村が追ひ着いたとみゆる。

（向うより眞田左衛門佐幸村、廿七八歳。家來一人に松明を持たせて先に立ち、あとより家來五六人が、澤山の蓑笠と松明とを持ちて出づ。それと見て清兵衛をはじめ、他の家來等も出迎へる。）

清兵衛。　お着きでござりましたか。

昌幸。　若い者どもの遲いことぢやな。どこで道草を食うて居つた。

幸村。　御覽の通り、空は陰つてまゐりました。この頃の秋の習、こよひは雨にならうかとも存じまして、途中の農家に立寄つて雨具の用意も致させ、松明も作らせ、それやこれやにて思はずも時を移しました。

昌幸。　（空を仰ぐ。）なにさま、今宵は雨にならうも知れぬ。

幸村。　暗い空には、星一つも見えませぬ。

昌幸。　併しわれ〳〵の行手は眼の前ぢや。ひさしぶりで嫁女に逢ひ、可愛ゆい孫どもの顏も見て、雨の音をしづかに聽きながら、ゆる〳〵と寢られるのぢや。（家來どもに。）武士の習とは云ひながら、幾日の野陣でそち達も疲れたであらう。今宵はこの城内に一泊して、具足を解き、草鞋をぬぎ、手足をのばして休むがよいぞ。

家來。　はあ。

（昌幸の家來どもは頭を下げる。）

幸村。　小助がこゝに見えませぬが、城内へ使者にでもお遣はしなされましたか。

昌幸。　むゝ、先刻城内へ遣はしたが、小助も戻らぬ。迎ひもまゐらぬ。待兼ねて、こちらから押掛けて行かうとするところへ、丁度にそちが追ひ着いたのぢや。さあ、行かう。

（昌幸は頤にて指圖すれば、七郎は再び馬を引きよせる。）

幸村。　父上。くどくも申すやうなれど、雨具も松明も用意いたさせてござりまする。

昌幸。　いや、雨具は邪魔ぢや。城へ行くまでは降りもすまい。

幸村。　城とはどこでござりまする。

昌幸。　知れたこと、この沼田の城ぢや。

幸村。　（きゝ返す。）沼田でござりまするか。上田でござりまするか。

昌幸。　（すこし焦れる。）くどい奴。それ、そこに見ゆる沼田ぢやといふに……。

幸村。どうでも、そこへ御立寄りなされまするか。

昌幸。今宵は城に一泊。あすも續いて雨ならば、蓑笠などは幾らでも借りて行かるゝものを、わざ〳〵用意するには及ばぬことであつた。まして松明まで……。（笑ふ。）そちはいつもながら用心深いな。

幸村。（意味ありげに笑ふ。）お役に立たぬやうなれば、仕合せでございまするが……。

（上のかたの草叢より穴山小助出づ。）

小助。殿、お待ち兼ねでございましたらう。

昌幸。おゝ、待ち兼ねた。して、迎ひの者はまゐらぬか。

小助。大手の木戸際へまゐり着きて、開門のことを申入れましたれど、容易に埒があきませぬ。

昌幸。昌幸がまゐつたと申したか。

小助。勿論　左様に申しましたれど……。（あとは云ひ淀む。）

昌幸。（機嫌を損じて。）さりとは、不思議ぢや。たとひ夜でもあれ、晝でもあれ、この昌幸が通るといふに、門を開かぬ仔細はない筈。よい、よい。この上は、おれがすぐに押掛くる。小助、案内いたせ。

小助。はあ。

幸村。父上。どうでもお越しでござるか。

昌幸。（馬に乘る。）皆もつゞけ。

（小助は家來より松明をうけ取りて先に立ち、七郎は馬の口をとりて、上の方の草叢を分けてゆく。清兵衛等もつゞいてゆく。幸村とその家來だけはあとに殘る。）

幸村。皆も定めて疲れたであらう。しばらく休息いたせ。

家來。はあ。

（家來の一人は蓑をしけば、幸村はその上にあぐらをかく。家來共も草に坐る。）

家來一。すぐに御城内へはお越しなされませぬか。

幸村。行つたところで、又こゝへ戻つて來ねばなるまい。（笑ふ。）いつそ行かぬが優かも知れぬ。所詮こよひは雨にぬれて、夜通しの道中と覺悟せねばなるまい。今のうちに足をやすめて置け。

家來一同。はあ。

（鳥の羽搏きの音きこゆ。）

眞田三代記

幸村。（空を見る。）寐鳥が何におどろくぞ。（ふところより短筒を取出して見る。）これは南蠻渡來の短筒、この頃やう〳〵手に入れたが、まだ撃ち試しをするひまがない。

（幸村は家來の持つたる松明にて、短筒の火縄をつける。）

幸村。（起つ。）羽音ばかりで鳥の影はみえぬ。（云ひながら奥をみる。）松明をかざせ。

家來。はあ。

（家來は松明をかざせば、幸村は奥の方にむかひて、短筒の火蓋を切る。家來は松明を片手に走りゆきて、草叢の奥より一匹の狐を引つさげて來る。）

家來。お見事でござりました。（狐を見せる。）

（他の家來共ものぞいて見る。）

幸村。（短筒をあらためる。）むゝ、大將の持つにはよい飛び道具ぢや。狐の皮もなにかの役に立たう。足をくゝつて持つてゆけ。

（家來二人はその狐をうけ取りて、縄にて四足を縛る。幸村は笑ひながら短筒をながめてゐる。再び鳥の羽搏きの音。）

――幕――

第二幕

沼田の城、内曲輪の門外。

上の方によせて城門。左右は石垣のうへに草堤、堤の上に松の大樹あり。堤の下は内堀のこゝろにて、堀端にも低き堤あり。柳の立木あり。

（門の外には眞田昌幸が鎧櫃に腰をかけてゐる。田口七郎が馬の口を取つてゐる。その左右に穴山小助、村上清兵衛、ほかに家來七八人が立つてゐる。薄く水の音。門の奥にては陣鐘を打つ聲遠くきこゆ。）

昌幸。（耳を傾ける。）なんぢや、あの鐘は……。

小助。非常を知らする鐘ではござりますまいか。

昌幸。非常を知らする鐘……。では、力づくで飽までも昌幸主從を追ひかへす心かな。

七郎。さりとは心外の儀でござりまする。たとひ伊豆守どのがお留守ともあれ、大殿は現在の親御ではござりませぬか。

清兵衛。　お留守をあづかる奥方に取つても身御の大殿を、力づくで追ひ返さうとは、あまりの無禮かと存じまする。

七郎。　この上は容赦はござらぬ。このまゝおめ〳〵追ひ返されては、眞田の黨の恥辱でござらう。

清兵衛。　この門ふみ破つて押通るより外はござらぬ。（他の家來に。）左衞門佐どのは、何してござるか。早う見てまゐられい。

家來一。　はあ。（行きかゝる。）

小助。　いや、待たれい。たゞ一圖に追ひかへす心ならば、外曲輪で飽までも食ひとむるが當然、かうして內曲輪まで案內せられたからは、お留守をあづかる奥方になにかの思召があるやうにも見申した。先づしばらくお控へなされ。

昌幸。　小助が申す通り、みだりに身を追ひ返すやうな嫁ではない筈、これには仔細がありさうにも思はるゝ。最初は外曲輪の門前で押さへたものが、二度目のかけ合で兎も角もこゝまで通したからは、もう一度かけ合ふたら安々と內曲輪へ案內してくれうも知れね。腹は立つものゝ、城內には可愛ゆい孫もゐる。久振りで祖父がたづねて來て、すぐに喧嘩沙汰もおとなげない。おれも出來るだけは我慢する。そち達もまあ待て。

家來一同。　はあ。

昌幸。　家老の善太夫めに嚴しく談じて遣つたれば、やがて出直して迎ひに來るであらう。いや、丈夫なやうでも俺も年を取つたか。馬の上に一日乘り通したので、どうやら腰が痛んで來た。

小助。　一日の御道中、さぞお疲れでござりませう。

昌幸。　不思議なもので、眼のまへに敵の影が見ゆると、俄に氣が引き立つて、若い者どもと同じやうに手も足も健かに働くが、唯かうしてゐると何うも意氣地がない。やつぱり爭はれぬ年のせゐぢやな。はゝゝゝゝ。

（門內より侍女お鈴は武裝して薙刀を持ちて出づ。つゞいて侍女二人、おなじく武裝して出づ。その一人は松明を持ち、一人は敷皮を持つ。）

お鈴。　安房守さまに申上げます。

小助。　何事でござるな。

お鈴。　唯今奥方これへお越しでござりますれば、しばらく御休息くださりませ。

昌幸。　こゝで休息せいと申すか。

お鈴。はあ。

（お鈴は仙の侍女に指圖して、敷皮を昌幸のまへに持ち出す。眞田の家來はうけ取りて、その敷皮を地にしけば、昌幸はあぐらをかきて坐る。）

昌幸。やれ、やれ。これで少しは樂になつた。とてものことに白湯でも水でもおくりやれ。

侍女。はあ。

（侍女の一人は引返して去る。）

昌幸。（お鈴に。）今聞けば、奥方はこれへお越しといふが、どうでもその門内へは入れぬ心か。

お鈴。さあ、いづれ奥方から直々に申上ぐるでござりませう。

昌幸。それから、今きこえた鐘の音はなんぢや。一先づ内曲輪へ引き入れて城内の人數を呼びあつめ、われ〳〵を袋の鼠にして生捕りにでもする積りか。

お鈴。（迷惑して。）なんでその様な事を……。

昌幸。どうも腑に落ちぬ事だらけぢやが、まあ、よいわ。奥方が出て來たら直々に聞き糺すといたさう。おれは氣が短い。早く奥方をこゝへ呼んで來やれ。

お鈴。はあ。（引返して去る。）

昌幸。（家來に。）幸村はまだ見えぬか。彼奴はおれがこゝへ來ることに不同意らしい口ぶりであつたが、なるほど來て見ればこれぢや。さりとは忌々しい。おれももう堪忍袋が破れさうになつて來たぞ。

（門内より眞田伊豆守信幸の室お仙の方、二十八九歳、引立烏帽子をかぶりて薙刀を持ち、侍女一人は松明を持ち、一人は床几を持ち、一人は湯を入れたる椀をさゝげて出づ。）

小助。おゝ、奥方……。

（眞田の家來は皆ひざまづく。）

お仙。お父上にはいつもながらお健かの體を拜しまして、おめでたう存じ上げます。

昌幸。（坐りしまゝにて。）いや、そんな會釋はどうでもよい。早速ぢやがお仙どの。昌幸が今宵當城へ立寄つたに、なんの彼のと故障を申して、先づ外曲輪の門前でさゝへ、更に内曲輪の門前で遮る。（やゝ腹立たしげに。）その仔細はどうぢや。

お仙。失禮は幾重にもお詫び申上げます。（丁寧に會釋する。）唯今はお湯の御所望とうけたまはりましたが、すぐに召上りまするか。

昌幸。（皮肉らしく。）自分のせがれの住む城ぢやで、白湯の所望ぐらゐは致してもよからうと思ふ

てな。

お仙。　勿論でございます。

（お仙は侍女の一人に眼配せし、薙刀を渡して白湯の椀をうけ取り、ひざまづきて手づから昌幸に さゝぐれば、昌幸はうけ取りて飲む。）

お仙。　お湯加減は如何でございます。

昌幸。　むゝ。まあ、よいわ。（云ひながらお仙の姿をぢつと視る。）これ、お仙どの。お身をはじめ、そこにゐる女共、揃ひも揃うてその扮装はどうしたことぢや。夫の留守にはいつもさうしてお居やるのか。

お仙。　夫が出陣いたしてから半月あまりにも相成りまするが、かやうな扮装をいたしましたは今宵が初めてゞございます。

昌幸。　なに、今宵が初めてぢや。（いよ〳〵氣色を損ずる。）では、昌幸がまゐったので左様な扮装をいたしたと申すか。もう坐つてはゐられぬ。その仔細きつと承はらう。しかと云へ。

（昌幸は持つたる椀を投げすて、敷皮を蹴放して起ちあがり、もとの鎧櫃に腰をかける。お仙はしづかに會釋して床几にかゝる。）

お仙。　その御立腹は重々御もつともでございます。したが、そのお答へをいたしまする前に、わたくしからもお父上に些とおたづね申したい儀がございまするが……。

昌幸。　なんぢや。逆捻になにを聞かうといふのぢや。

お仙。　夫伊豆守は唯今いづこに居ります。

昌幸。　野州の犬伏にゐる筈ぢや。それを知らぬか。

お仙。　お前様も御一緒ではございませなんだか。

昌幸。　わしも勿論一緒にゐたが、仔細あつて引き分かれ、幸村だけを召連れて、これより本國の上田へ引揚ぐるのぢや。

お仙。　それをおたづね申したいのでございます。親子兄弟三人が一緒に出陣いたしながら、兄ひとりだけをあとに殘し、親御と弟御だけが連立つて御引揚げとは、なにかの仔細が無くてはかなひますまい。それをはつきりと仰せ聞けられて下さりませ。

（少し躊躇する。）いや、仔細といふほどのことでもない。伊豆守はこの沼田の城に歸るわれ〳〵は信州の上田に歸る。路が遠いので一足先きに出發したまでぢや。なにしろ、いつまでもこの門前で押問答もなるまい。兎もかくも奥へ通してくれ。わしばかりでない、家

來共もみな疲れてゐる。今夜はゆる〳〵と休息させてやりたい。早う案内いたせ。（起ちあがる。）

お仙。　先づお待ち下さりませ。折角ではござりまするが、どうもお泊め申すことは相成りませぬ。

昌幸。　（又もや氣色を損ずる。）泊めることはならぬ……。なぜならぬ。おれの留守に親父めが來たら、門前からすぐに追ひ拂へと、伊豆守が申付けて置いたか。

お仙。　左樣なわけではござりませぬが……。

昌幸。　では、お身の一存で斷るのか。くどくも云ふやうぢやが、わしも疲れてゐる。氣ばかり若いつもりでも年が年ぢや。鞍の上に一日乘り通したので、だん〳〵に腰が痛んで來た。家來共も疲れてゐる。それで今夜はこゝに泊めて貰うて、あすは早々に出發するといふのを、なんで斷る。何で拒む。お身は本多平八郎忠勝の娘でないか。舅が疲れて來たときに、門前から情なく追ひ返せと、本多どのが敎へたか。あらためて云つて聞かすが、この城のあるじ眞田伊豆守信幸はこの昌幸の悴ぢやぞ。わが子の城へ父がたづねて來るに何の不思議がある。それを嫁がおのれの一存で追ひ返す。しかもその物々しい扮裝はなんぢや。昌幸が押して通ると申したら、お身はその薙刀で遮る氣か。いや、言語道斷。日本一の不孝者を嫁に取つて、家來どもの手前も恥かしいわ。むゝ、おれもいよ〳〵勘忍袋の緒が切れた。先刻から家來どもがこの門ふみ破つて通らうといふのを、先づ〳〵と取鎭めてゐたが、もうかうなれば昌幸自身が采を振つて、無理無體にも押して通る。さあ、その薙刀を取れ。

お仙。　は。（躊躇する。）

昌幸。　（詰めよる。）さあ、この白髮首を見事その薙刀にかけて見ぬか。

お仙。　は。

昌幸。　但し邪魔せずと奥へ通すか。えゝ、面倒な。（家來を見かへる。）者共つゞけ。

家來一同。　はあ。

（家來等は昌幸と共に進まんとすれば、お仙は侍女の手より薙刀をとりて起つ。）

お仙。　まだお判りになりませぬか。唯今うけたまはればこの仙を日本一の不孝者ぢやと仰せられました。嫁は不孝でも悴は孝行者、伊豆守信幸がお父上に對して、日ごろ孝心あつきことは、おまへ樣にもよく御存じでござりませうが……。

昌幸。　むゝ。伊豆守がゐたら斯うはあるまい。嫁は他人ぢや。

お仙。　嫁は兎もあれ、わが子の伊豆守をおまへ樣は憎いと思召すか。

昌幸。誰がわが子を憎いと申した。（嘆息するやうに。）憎ければ親子別々にはならぬ筈ぢや。可愛いければこそ、何事も悴の心任せにして、かうして別れて歸つて來たのぢや。

お仙。問ふに落ちず、語るに落ちるとはそのこと。それでいよ〳〵判りました。お父上。お通し申しませう。

昌幸。通すか。むゝ、故障なしに案内するか。

（昌幸はまた行きかゝれば、お仙は薙刀を地に置きて再びひざまづく。）

お仙。お通し申します。屹と御案内申します。その代りにわたくしにもお願ひがございます。まことに伊豆守が可愛ゆいと思召さば、なぜ親子が別々におなりなさる。お隠しなされてもわたくしはよく存じて居ります。江戸の内府様が會津御征伐の留守をうかゞつて、大阪方の石田小西がいよ〳〵旗あげの風説は、こゝらまでももう聞えて居ります。その矢先にお前様が野州の御陣を引きあげて俄に御歸國とあるからは、おそらく大阪方と諜し合せて御本國の上田に楯籠り、北陸道を攻めのぼる關東勢を扼ひ止むる思召でございませう。お父上と左衛門佐どのは大阪方、夫伊豆守は無二の關東方、親子ながらも敵味方とひき分かれて、お前様ばかりが御歸國の途中、こゝへ御立寄りなされたのではございませぬか。若しそれならば、お父上。なにとぞお心をひるがへされて、伊豆守に御味方くだされ、勝つも負くるも親子一緒と御覺悟なされてはくださりませぬか。

昌幸。かうなれば何も彼も云うて聞かすが、察しの通り、大阪方このたびの旗揚げについて、悴どもの意見一致せず、兄は關東へ附かうといひ、弟は大阪に味方するといふ。そのなかに挾まつた昌幸は、太閤の舊恩忘れがたく、大阪方と分別をきめた。併し親子でも心は別々。不得心の伊豆守を無理に大阪へまゐれとは云はぬ。西へゆきたい者は西へ行く、東へ行きたいものは東へゆくと、たがひに快く別れて來たのぢや。今さらお身達がなんと云はうとも、昌幸の心は動かぬ。無駄な意見は止めにおしやれ。

お仙。この上は強ては申上げますまい。但し關東大阪と引き分かれ、敵味方と定まるからは、お父上でも弟御でもこの城内へ一寸もお通し申すことはかなひませぬ。（薙刀を把りて起つ。）伊豆守と心を一つにして、關東に味方すると仰せあれば格別、左もなくばこのまゝに御引取りくださりませ。我子を憎いと思召すかとおたづね申したはこゝのこと。たとひ一夜たりとも敵方のおまへ様方をこの城内に引き入れましては、伊豆守の武士が立ちませぬ。江戸の内府様にも申譯がございませぬ。わが子の武士を捨てさせても、押して通ると仰せら

れますか。わが子は可愛ゆいとのお詞にいつはり無くば、なにとぞ穏便に御引取りくださるやう折入つてお願ひ申します。これほどに申しても御聞分けなく、飽までも力づくで押通るとござりますれば、夫の留守をあづかる妻の役、心ならずもこの薙刀を把らねばなりませぬ。お道筋のお邪魔も致さねばなりませぬ。

昌幸。　では、この昌幸を敵と見て、どうでも城内へは入れぬといふか。よし、それならば嫁でもない、舅でもない。敵と味方が初めての見参ぢや。敵にうしろを見せておめ〳〵とは戻られぬ。本多平八郎の娘にどれほどの手並があるか、この昌幸に見せておくりやれ。

（昌幸は身がまへする。小助は支へる。）

小助。　いや、しばらく。先刻よりだん〳〵思案いたしまするに、奥方の仰せも一々御もつともかとも存じられまする。敵味方とは申しながら、日ごろ御孝心あつき伊豆守どのに御迷惑を相かけまするは、まことに忍びぬこと。（家來等に。）おの〳〵は何と思ふな。

七郎。　なるほど小助の云はるゝ通り、一夜たりとも我々がこゝに足を止めては、若殿の御迷惑に相成る道理ぢや。

清兵衛。　たとひ野宿するまでも、このまゝ穏便に引揚ぐるが無事であらうぞ。

昌幸。　さりとては弱い奴等。さつきはあれほどに立騒ぎながら、今更となつて尻込みするか。小助、止むるな。七郎、清兵衛。おれにつゞいて、蒐れ、かゝれ。

家來一同。　はあ。

（口では云へど、七郎等をはじめ、家來一同はあとへ退る。）

昌幸。　（じれる。）えゝ、主人の指圖をなぜ肯かぬ。たとひ無事に引揚ぐるまでも、その女のしやつ面を思ふさま踏みにじつた上でなければ胸が納まらぬ。さあ、行け。おれにつゞけ。

小助。　（又支へる。）殿。

昌幸。　えゝ、邪魔するな。

お仙。　どうでもお相手せよと仰せられまするか。

昌幸。　知れたことぢや。

（昌幸は進まうとするを、小助は支へる。お仙の方は薙刀を把りて冷かにながめてゐる。門内よりお鈴出づ。）

ま鈴。　奥方に申上げます。

お仙。　なんぢや。

お鈴。　おちい様お越しとお聞き遊ばしまして、兩若様が是非逢はせてくれとおむづかりでござりますが……。

昌幸。　なに、孫達がおれに逢ひたいといふか。早うこれへ呼べ。

お鈴。　はあ。（お仙の方の顔色をうかゞつてゐる。）

お仙。　あれほど云ひ聞かせて置いたに……。（考へる。）おちい様も逢はうと仰せられる。兎もかくも連れて來や。

昌幸。　早う呼べ、呼べ。

お鈴。　はあ。

（お鈴は引返して行かうとする時、門内より伊豆守の嫡男源三郎、十歳。次男内記、六歳。あとより十四五歳の小姓三人附き添ひて出づ。）

源三郎。　（透し視る。）おちい様。

内記。

昌幸。　（二人はつか〳〵と昌幸のまへに走り寄り、うや〳〵しく會釋す。）（俄に機嫌を直す。）おゝ、源三郎、内記。大きうなつたな。いづれも行儀のよいことぢや。ちいも改めて會釋しますぞ。（會釋する。）いや、久しうどざつた。

源三郎。　おちい様。なぜいつまでもこの門前に立つておいでなさる。

内記。　早うお通りくださりませ。

昌幸。　いや、よう云うてくれたぞ。わしも通りたいは山々ぢやが、そち達のおふくろが色々の理窟をこねて、どうしても通してはくれぬのぢや。

源三郎。　（源三郎と内記は母のそばに來る。）母上様。おちい様が久振りでおいでなされたに、なぜお通しなさらぬのでござります。

内記。　おちい様も通りたいと仰しやります。

源三郎。　早う御案内して下さりませ。

源三郎。　（お仙の方は默つてゐる。）おちい様をお泊め申して、あすはわたくしの的弓を御覽に入れたうどざります。

内記。　わたくしの手習ひもお目にかけたうどざります。

源三郎。　なぜ御案内して下さりませぬ。母上様。

内記。　母上様。

（ふたりは母に縋る。）

お仙。そのやうな我儘を云うてはなりませぬ。おぢい様を通してよければ、おまへ達がせがむまでもなく、わたしが疾うに御案内申します。それがならぬので……お斷り申してゐるのぢや。まあ、おとなしう控へてゐませうぞ。

源三郎。はあ。

（源三郎は年上だけにおとなしく默る。内記は再び昌幸のそばへゆく。）

内記。おぢい様。

昌幸。なんぢやな。

内記。母上がお通し申さぬといへば、わたくしが御案内申します。すぐにお通りくださりませ。

（昌幸の手を把る。）

昌幸。おゝ、可愛ゆいことをいふ奴ぢや。兄弟のうちでも、そちが取分けて祖父になじんでゐる。（内記の頭を撫でる。）わしはな、今この門へ入れろ入れぬの爭ひで、そちのおふくろと睚み合うてゐたのぢや。これ、この太刀を引きぬいて斬合ひを始めようとも思うたのぢやが、そこへそち達が出て來たので、わしも力が抜けてしまうた。はゝ、おどろくことはない。可愛ゆいそち達に免じて、もう斬合ひも喧嘩もせぬ。わしはおとなしく歸るとせうぞ。

内記。いえ、いえ。お歸りなされますな。

昌幸。歸つては惡いか。

内記。どうぞお泊りくださりませ。

（内記は昌幸の手をひく。曳かれて昌幸はよろめくやうに一足進みながら、お仙の方と顔を見あはせて又立ちどまる。）

昌幸。いや、なんぼ云うてもそれはならぬ。無理にこゝに泊まらうとすれば、あのおふくろと喧嘩をせねばならぬ。それではそち達に氣の毒ぢや。わしはもう我慢して歸る。な、聞き分けて放してくれ。（取られし手を振り放さうとすれば、内記はやはり縋つてゐる。）これ、どうしたものぢや。それほどまでに祖父を慕ふか。（内記の顔をぢつと視る。）これ、内記。そちは祖父に手習ひを見せると云ふたな。

内記。はい。

昌幸。弓や劍術の稽古もしてゐるであらうな。

内記。弓も劍術も習うてをります。

昌幸。馬にも乘るか。

内記。兄様は乗りますが、わたくしはまだ乗つたことはございませぬ。

昌幸。では、ちいの馬に乗せて遣らうか。

内記。(嬉しげに。)はい。

(昌幸は頤にて指圖すれば、七郎は馬をひき寄せる。)

昌幸。(内記を抱く。)それ、馬にはかうして乗るものぢや。

(家來共も手つだひて、昌幸は内記を鞍の上に乗せる。)

昌幸。(扇をひらく。)それ、どうぢや。はゝ、面白いか。はゝゝゝゝゝ。

(昌幸は内記をあやすやうにしてそこらを乗りまはす。お仙の方は屹と眼をつけて起ちあがる。)

昌幸。それ、馬はかうして走らすものぢや。

(昌幸は扇にて馬を打ち、不意に向ふへ走らせようとする。お仙の方は薙刀をかゝへながら走り寄つて馬の尾筒をつかんで引戻し、更に馬の前に立ち塞がる。お鈴も走り寄つておなじく馬の前に立つ。)

お仙。お父上、いづこへお出で……。その子を人質になされますか。

昌幸。(馬上にて。)いや、人質でない。あまりに可愛ゆいので連れてゆくのぢや。敵味方となつた以上、大事の孫をそつちへは置かれぬ。源三郎だけは殘してゆく。この内記はわしが確かに預かつたぞ。

(昌幸は馬を進めようとするを、お仙の方とお鈴は遮る。眞田の家來も、城方の侍女も小姓も、たゞ呆れてうろ〳〵してゐる。)

お仙。なりませぬ、なりませぬ。この度のいくさが鎭まつて、おたがひに無事でございましたら、おぢい様の御機嫌うかゞひに何時でも孫を差出しませう。夫の留守といひ、今この場合に、幼少の忰をおあづけ申すことは相成りませぬ。(聲を勵まして。)さあ、お戻しくださりませ。わが子を母の手へお返しくださりませ。どうでも手籠めにして連歸るとあれば、この薙刀で馬の諸足薙いで落し、おそれながら御老體を眞逆様……。不孝の嫁の手のうちを今こそ御覽に入れませうぞ。

お鈴。それ、皆様、舅御様とて御遠慮なさるな。

侍女。はあ。

(侍女と小姓等はばら〳〵と走せ寄つて、昌幸の馬の前後を取りまく。)

お仙。先刻の鐘の音をおまへ様はなんとお聞きなされた。城内一内へ非常を知らする合圖の鐘、

昌幸。　素破といはゞ大門を押開き、切つて出づる用意は整うて居りまするぞ。
　　えゝ、多寡の知れた葉武者共、昌幸が片端から蹴散らしてくるゝわ。止めらるゝなら止めてみよ。
　　（昌幸は向うへ馬を進めようとすれば、小助、七郎、清兵衛等も見かねて走り寄る。）
小助。　大殿、しばらく。
七郎。　しばらく。
清兵衛。　（小助等は馬の前に立ち塞がる。向うより眞田幸村は以前の家來どもを連れて出で、それと見るより足早に進みよる。）
幸村。　父上、なんとなされた。
お仙。　おゝ、左衛門佐どの。お父上は内記を手ごめにして、連れて歸らうとなさるゝので、よんどころなくお支へ申して居りまする。
幸村。　それは思ひもよらぬこと。父上、幸村がまゐりました。兎もかくもお鎭まりなされ。（馬の前に來る。）その内記はわたくしにも大事の甥でござる。滅多にお手さしは相成りませぬ。一先づこちらへお渡しくだされ。眞田安房守ともあるべきものが幼子を人質に取つたなどと沙汰されては、弓矢の名折れでござりませうぞ。
昌幸。　若い者の知らぬことぢや。これは人質でない。ぢいが孫をかゝへてゆくのぢや。
幸村。　それならば猶のこと、なぜそのやうな御手暴いことをなさる。内記は幸村がおあづかり申せば、先づお渡しくだされ。父上、わたくしをお疑ひなさるな。
昌幸。　（幸村は家來を見かへりて、内記を馬より抱き下させる。）
幸村。　幸村は寧めるやうにいふ。昌幸は無言で睨んでゐたるが、やがて漸々に内記を渡さうとすれば、
昌幸。　姉上、内記はたしかにお戻し申しまするぞ。
幸村。　（舌打して。）大方さうであらうと思うた。
昌幸。　（それを聽かぬやうに。）あまりお歸りが遲いので、幸村がお迎ひにまゐりました。いざお立ちなされ。
昌幸。　（忌々しさうに。）むゝ、行かう。皆もまゐれ。
幸村。　（昌幸は馬を早めて向うへ立去る。幸村は早くゆけと指圖すれば、小助、七郎、清兵衛、その他の家來もあわてゝそのあとを追うてゆく。幸村とその家來だけがあとに殘る。）
　　これで先づ埒が明きました。路を急げばこれにて御免くだされ。（お仙の方に會釋して行きか